

新撰樂道類聚 十七

子 11
708
17



門 子 114
流 708
卷 17



樂道類聚大全第二十六

筭律和解目錄

律呂本元

黃鐘為万夔夔

三分損益上下相生

黃鐘生十一律

變律

變聲

八十四聲

七色有呂律差

京房六十律

黃鐘生度量權衡

第一審度第二嘉量
第三謹權衡

十二律調之名

黃鐘

黃鐘之實

十二律之實

五聲

五色大小尊卑之次第

十二律相生有順逆

一律有三色

候氣之法

崑崙山乃北谷以名なり

三禮義宗曰十二律ハハ乙卯陽管六あり
陰管六ありをホキキ十二ありハ乙卯十二
辰に配テ故に十二律あり子を黄鐘トキ丑
ト大呂トす寅ト大簇トす卯を夾鐘トキ辰
を沽洗トす巳を仲呂トす午儀雍賓トす未
ト林鐘トす申儀夷則トす酉ト南呂トキ戌
儀無射トキ亥ト應鐘トす陽六ト律トキ黄
鐘大簇姑洗雍賓夷則無射此六者陽月之管
ト也ト律トキ陰律者法也言ハ陽氣生ト施
ト各其法ト也
一義云律ハ師也陽氣を師導してト也ト通
達セシムル也陰六を呂トシ大呂應

鐘南呂林鐘中呂夾鐘此六者陰月之管之也
を呂とんとして呂者助明也陽を助て功を
成ゆんるなり

一義云呂者侶なり律に對して氣を導きさら
せしむる侶なるゆんるなり

壹越調子黃鐘折金調丑大呂平調寅大簇勝絶調卯夾鐘

下無調辰姑洗双調巳仲呂鳧鐘調午蕤賓黃鐘調未林鐘

鸞鏡調申夷則盤涉調酉南呂神仙調戌無射上無調亥應鐘

樂道類聚卷第二十六

筭律和解

從四位下遠江守太秦昌名撰

律呂本根

樂書要録曰律曆志に六律十二あり陽六を
律とす以て氣を統物を類を一として黄鐘
二小云太簇三小云姑洗四小云蕤賓五
小云夷則六小云無射陰六を呂とす以て陽
と施し氣を宣一曰林鐘二にツツ南呂三に
曰應鐘四に曰太呂五に曰夾鐘六にツツ仲呂
黄帝伶倫として大夏北西崑崙此陰一り竹
の解谷を採と取し先生して其竅厚均者ハ
兩節の間と断てこれを吹以て黄鐘乃宮とす

十二律管を製して以て風皇は鳴を聴し其雄鳴
六を雌鳴も亦六以て黄鐘は宮に比て之を以て
生之へ是を律の本とす聖化は代天地の気
合て以て風を生す天地乃風氣正して十二律
定り也と云々

按注にいづく大夏とい西戎國なり解谷とい
解は脱かり谷は竹は溝かり竹のこゝろに
さりと取との穴あり竅とい孔かり崑崙は陰とい

黄鐘為萬変本

類経律原云歐陽子曰律と造者ハ黍を以て
以一黍之廣積為分寸以て度にあつた一黍の多
少はよく主合とせん以て量に著る一黍は銖

兩積て軽重とせん以て權衡にわらる三者
いづく黄鐘より起る故に萬事は本と云鄭世子
いづく大度量權衡法を黄鐘より取ゆん
蓋し其天地の氣と相應するを貴也朱子の
所謂先天は圖と一般とを夫先天は圖者河
圖雜書也河圖之位十天地之體數也雜書之
位九天地之用數也蓋一切萬変ハ陰陽とい
形すは圖書は二義をもち陰陽之道盡矣是
と律曆之本原數學之鼻祖とす也故に古
人は算律之妙惟此二種ありとの一ハ縱
黍之長を以て分とい九分をすとい九寸を
黄鐘とい九にして六と九にすれハ八十一
分と得象ちと雜書之九自相乘するのすに

取有り是と律本よりす此淮南子に載る者
一、横黍の廣とを以て十分とすや
十寸と黄鐘と寸十にして其を十とす
百分と得象と河圖は十とす相乘之數に
と然なり是を度母とす大史公は載者也
二術異といふも其律を則同じし蓋縦黍
之八十一分の過二横黍之百分にあつて而
横黍は以て過、縦黍乃長と相合の
河圖之偶確書之奇參位錯綜而律度方に
ちて誠と天地自然之妙人力に安排
のふあつて二法之外存九十分試黄鐘とす
者也し劉歆班固とつて乃以九十分
黄鐘寸是亦斜黍之度と合す此者なり其悞

と推原に及ぶ一京房より始る房々、と古と去
こやいと遠かりを明く古法九分とすとも
算をたふすと頗煩ゆして初學曉くべきと以て
すより創てこき、法をつくりて九を變へて十
に故に前後志に九寸とす今の人九寸と宗とし
て餘法と宗とせき然漢志は偏見に十とす
苟も能變通して一編と惑いずんば則縦横斜
黍と黄鐘は律と合んと云く同書辨黍の章に云
黄鐘之律と尺より生して尺の寸より黍より
生る黍と累て尺をつくる三法もまた古より
こきあり横黍と云者一黍之廣と一分とすはなり
縦黍とす一黍之長と一分とすはなり斜黍と云
縦小ありは横にありを斜とせく相排也凡

黄鐘の長横黍を以てことを言ふときい則一百分を
太史公のいゆに子一分と云是也縦黍を以て言
之と云い則八十一分と云淮南子に所謂其數八十一
云是也斜黍を以て言之と云い則九十分と云前後漢志
い日也九十分と云是也三法異といへども而も律
則同身を量黍と云り人の法上黨は境内土地肥
たると云らに産すれ者といて佳しん即今之糯米
俗に黄米と名つるれ者是也鄭世子いどく古の
上黨麗即今は山路の安者境内に五色の黍と産
は其色は黍も亦數種あり軟黍酒に釀すに堪大
るも此と拒と名づく硬黍飯に炊くに堪る者稌
名はく一稌は内西類なりありと程と名つる律家
に用とらる惟拒而已いふに拒黍は中なる者と

取とらる蓋中用之黍と云中等此謂にあらる俗語
に物と選り中用不中用と云るに亦中等と指
しあはるる云々以下文畧す
又同書云大黃鐘の音ハ宮音也最長最濁是其本體
然則黍之最大者すより真の拒黍とすれのみ
云々

黄鐘

律呂新書云長九寸空圍九分積八百一十分
同書云按に天地はを一にこしと云りて十
終ふ其一二三五七九と陽とを九とを陽之成也其
二四六八十と陰とを十者陰之成也黄鐘ハ陽也此
こしハ陽氣の動なり故に其ハ九分寸之數也氣
此元とすれ人得て見るへん竹と管下管と

方してこれと吹て色和しこれとくくくく
 應するにむしつて而後數始てあらはれ均其長
 九寸と得其圓をつまらうおするに九分と得
 此章九分と云も其實とほりるに八百一十分と得
 此皆十分寸の長九寸圓九分はりり八百一十分と律此率
 とは度量權衡是にかつて法を受十一律是にち
 て損益すと云々注に算法八百一十分を置て久
 らぬ九重に作し重しに九分と得圓田術三分益
 て一十二を得用方を以て除之三分四厘六毛強と
 得ると實とん徑此數不盡三毛八絲四忽今圓
 積此とと求て徑三分四厘六毫を以て自相乘し
 十一分九厘七毫一絲六忽と得くくくく用方不
 尽此は二毫八絲四忽と以て二十二分或得管此

かけ九十分を以て乘之一千八十分と得と方積の
 くくくを四分と三とくくくて圓積くく八百一十分と
 得とん

律呂新書

河南程氏曰黃鐘之色亦不難定世自有智奇
 者將上下色改之既得正便將黍以實其管者
 管實得幾粒然後推而定法可也古法律管當
 實千二百粒黍今羊頭黍不相應則將數等驗
 之者如何大小者方應其數然後為正昔胡先
 生定樂取羊頭山黍用三等篩子篩之取中等
 者特未定也又曰以律管定尺乃是以天地之氣
 為準非秬黍之比也秬黍積數在先王時惟此
 適與度量合故可用今時則不同橫渠張氏曰

律呂有可求之理德性淳厚者必能知之云云
後漢鄭康成月令注曰凡津空圍九分孔韻
違疏曰諸律雖短長有差其圍皆以九分為限
蔡邕銅龕銘曰龕黃鐘之宮長九寸空圍九
分容拒黍一千二百粒稱重十二銖兩之為一
合三分損益轉生十一律云云

三分損益上下相生

黃鐘位子主十一月管長九寸空圍九分三分
損一下生林鐘林鐘位未主六月管長六寸三分
益一上生大簇大簇位寅主正月管長八寸三
分去一下生南呂南呂位酉主八月管長五寸
三分三分益一上生姑洗姑洗位辰主三月管
長七寸一分三分去一下生應鐘應鐘位亥主

十月管長四寸六分六厘三分益一上生蕤賓
蕤賓位午主五月管長六寸二分八厘三分益
一上生大呂大呂位丑主十二月管長八寸三
分七厘六毫如漢志說則蕤賓三分去一下生
大呂四分四寸一分
三分毫也大呂三分去一下生夷則夷則位申主
七月管長五寸五分五厘一毫如漢志說大呂
長四寸一分八厘
益一上生夷則云云夷則三分益一上生夾鐘
夾鐘位卯主二月管長七寸四分三厘七毫三
絲漢志說夷則三分去一下生無
射無射位戌主九月管長四寸八分八厘四毫
八絲漢志說夾鐘三分無射三分益一上生仲
呂仲呂位巳主四月管長六寸五分八厘三毫
四絲六忽餘二毫漢志說無射三分
損一下生仲呂云云

按すりに長管短管を生すと下生と云短管
より長管を生すと上生と云なり

黄鐘位子其數八十一主十一月下生林鐘林
鐘之數五十四六月と主し上大簇と生す
大簇之數七十二正月と主と下南呂と生す
南呂此と四十八八月とつと上姑洗と生
は姑洗のかす六十四三月とつと下應
鐘と生す應鐘此と四十二十月とつと上
蕤賓と生は蕤賓此と五十六五月とつと上
上大呂と生は上大呂此と七十六十二月と生は
下夷則と生す夷則此數五十一七月とつと
上夾鐘と生は夾鐘此と六十八二月
とつと下無射と生す無射のりと四十九

月とつと上仲呂と生は仲呂此と六十四
月を主とす極て生せんといふ
以上淮南子此説

愚按すは十二律辰位の子は黄鐘丑は林
鐘寅は上大簇卯は南呂辰は姑洗巳は應鐘午
は蕤賓未は上大呂申は夷則酉は夾鐘戌は無
射亥は仲呂如此位とわたりて相生し
林鐘南呂應鐘夾鐘大呂仲呂此六陰辰は
其對衝に居故に丑は林鐘は未は居て六
月と主し卯は南呂は酉の位は居て八月
と主し巳は應鐘は亥の位は居て十月と
つと未は上大呂は丑の位は居て十二月
を主し酉の夾鐘は卯の位は居て二月と主

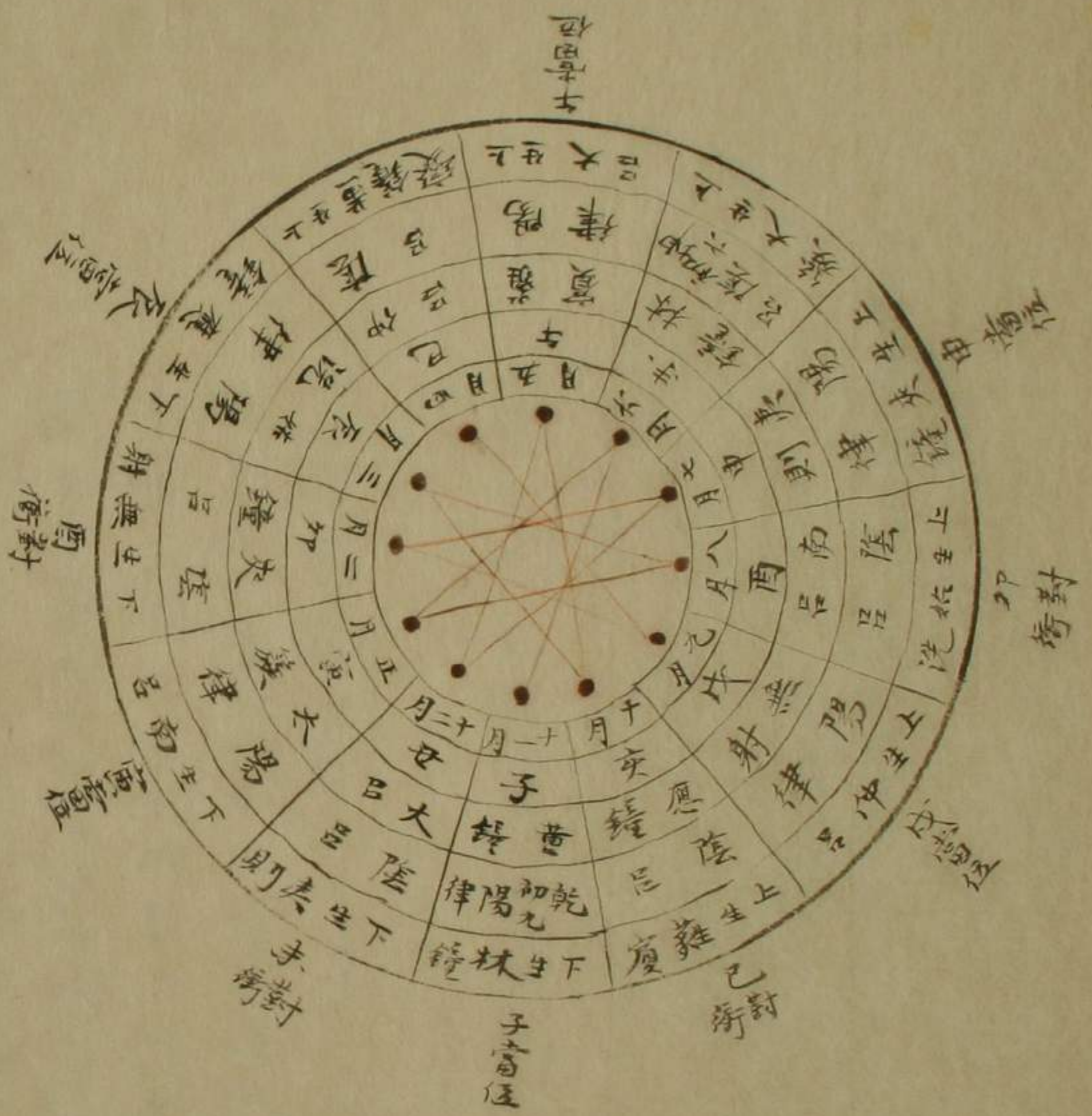
と云夫乃仲呂ハ己の位に居て四月とつと
死なり

三分損益算術云律書曰術ハ一を以て
下生す其者ハ其實を倍一其法と三
す上生を者ハ其實を四一其法と三
にす也云へるこまを三因三歸四因三歸の
法と云也假令ハ黃鐘長九寸其實十七万
七千一百四十七倍之して三十五万四千二百
五十四と成是と三にりて十萬八千。
九十八や成是即林鐘之實其長六寸と成なり
是二と因て三に歸す此術三分一と損を
此法あり林鐘六寸其實十一万八千。九十八
是に四と乘を四拾七萬二千。三十九二

と成こまを三にりて大簇の長八寸其實十五
萬七千四百六十四と成是四と因て三に歸す此
術即三分一と益此法也別法下生三分去一者
五十と加きて七十五に割也上生三分益一者
一百かけて七十五と倍へし

十二律相生之圖

子より午に至る間、陽方午より亥に至る
 陰方なり是説之時、陰陽方二層、皆陽
 屬六陰律、陰方二層、皆陰、屬六陽



按するに十二律此方位子より巳に至るまで
 陽方より陰呂交居するも皆陽に属す
 午より亥に至るまで陰方なるゆへ陽律此
 方にまゝ居るも皆陰に属す
 大陰陽此説より入り子陽及び陰寅の陽の
 のくく隔て折て言ふと、これと小陰陽の
 説と云ふより所謂大陰陽の説より子黄鐘一陽
 大呂二陽寅太簇三陽卯夾鐘四陽辰姑洗
 五陽巳仲呂六陽午蕤賓一陰未林鐘二陰
 申夷則三陰酉南呂四陰戌無射五陰亥應
 鐘六陰子より巳に至るまで陽のわりて陰
 志りて故に律管呂管を生すと下生と云
 呂律を生すと上生と云ふ午より亥に至る

陰升て陽退故、律生呂と上生、六呂生
律と下生と云午、至て變す、以、蕤賓重
れて上に大呂を生す、所謂小陰陽
説と云、子黃鐘乾、初九寅太簇乾九二辰
始洗、乾九三午蕤賓乾九四申夷則乾九
五戌、無射乾、上九此六律、數寄各本位、
居て陽、屬を世林鐘坤の初六、非南呂坤
六二、已應鐘坤の六三、朱大呂坤、六四酉夾
鐘坤、六五寅仲呂坤、上六此六呂、數偶各對
衝に居て陰、屬を世林鐘、對衝の未、
居卯の南呂、衝之酉、居巳の應鐘、
此亥、居未の大呂、對衝此世、居酉此夾鐘
ハ衝之卯、居寅此仲呂、衝の巳に居たり本位

と居六律を皆下生に對衝、居六呂を皆上生
す以上二説張必賓律厚ヲ以テ注之

黃鐘之實

子一 黃鐘之律

世三 為絲法

寅九 為寸數

卯廿七 為毫法

辰八十一 為分數

巳二百四十三 為釐法

午七百廿九 為釐法

未二千一百八十七 為分法

申六千五百六十一 為毫數

酉一万九千六百八十三 為寸法

成五万九千。四十九 為絲數
實一十七万七千一百四十七 黃鐘之實

按、黃鐘九寸三分を以て損益す故三とりり
十二辰を歴て一十七万七千一百四十七と成、
と黃鐘此實數とす也其算法先一を置て十
一度三とかく也黃鐘此長九寸、皆九數を
用九絲と毫、九毫を釐、九厘を分と
一と置て二度三とくも黃鐘の寸數と成
四度掛ま、黃鐘の分數と成六度乘ま、釐
數八度乘ま、毫數十度加ま、絲數と
成り或又一を置て九とかく、九寸と成

此九寸、九を乘す、辰の九々八十一分と
成又、九を減乘れ、千七十九厘と
成これ、又九とかく、申、六千五百六十
一毫、成又、九と掛ま、成乃五万九千、
四十九絲とす、亦黃鐘の寸分釐毫絲の
法、一を置て一度三とかく、絲法と成三度
かく、毫法五度乘ま、厘法七度乘ま、分法
九度乘ま、寸法とす、黃鐘之實數一十七
万七千一百四十七と九、割、一寸、高
九十六百八十三と成是を黃鐘ノ寸法と知也
又八十一分、小、廿、一分、未、二十
一百八十七とす、これを分法とす又七百二
十九厘に、り、付、一釐、數、己、二百四十

三と成是重法也又六十五百六十一毫日
付レハ一毫卯の二十七とナレハ是毫法也五万九
千〇四十九絲トモ建ハ一絲の〇すセハ三
と成ナリ以上愚按を以テ曉レヤヒキヤレ
記也律呂新書ハ算ノ如者黄鐘之實一十
七萬七十一百四十七之數を三を以テヨリテ
モ建ハ絲數五萬九千四十九絲トモ又毫法之
二十七を以テヨリ約モハ毫數六十五百六十一
トモ建ハナリ釐法ハ二百四十三を以テこれと
割約モハ厘數七百二十九厘トナリ分法ハ二千
一百八十七を以テこれと割約モハ分數八十一分
トモ建ハ寸法の一萬九千六百八十三を以テヨリ
ツモ建ハ寸數九寸ト成由是テ三分損益

一にて以テ十一律を生レ或曰徑圍之分ハ
十を以テ法トシテ相生之分厘毫絲ハ九を
以テ法トスルハ何レ之ヲ曰十を以テ法トスル
者天地之全數ナリ九を以テ法トスル者
三分損益ト因テ立ル也全數ハ十ト即テ
而も九を取相生者約十ト而も為九即十
ト取九者律の立レ名ん十をツモ建ハ九
トスル者用レ行レヨ名ん躰者中色と定ム
取レ名ん用者十一律を生スルヨ名んナリ

黄鐘十一律を主寸

子一分

一為九寸

廿三分二

一為三寸

寅九分八

一為一寸

卯二十七分，十六

三為一寸 一為三分

辰八十一分，六十四

九為一寸 一為一分

巳二百四十三分，一百二十八

二十七為一寸 三為一分 一為三釐

午七百二十九分五百一十二

八十一為一寸 九為一分

未二千一百八十七分一千二十四

二百四十三為一寸 二十七為一分

三為一厘 一為一毫

申六千五百六十一分，四千九十六

七百二十九為一寸 八十一為一分

九為一厘 一為一毫

酉一萬九千六百八十三分，八千一百九十二

二千一百八十七為一寸 二百四十三為一分

二十七為一厘 三為一毫 一為三絲

戌五萬九千四十九分三萬二千七百六十八六千五百

六十一為一寸 七百二十九為一分

八十一為一厘 九為一毫 一為一絲

亥一十七萬七千一百四十七分六萬五千五百三

十六

一萬九千六百八十三為一寸 二千一百八十

七為一分 二百四十三為一厘
 二十七為一毫 三為絲一為三忽
 算法分字以上ハ黄鐘比全數分字以下ハ
 諸律黄鐘九寸より損益して相生せしむ
 る所以長短比數也陰數ハ其實を倍し陽
 數ハ其實を四しするなり先字比一分と
 云ハ九寸の黄鐘を云也此ハ三分二とハ
 黄鐘九寸を三分にして一弦三寸とハ二
 を六寸とハ是則林鐘の管比長なり次に
 寅九分八とハ此ハ三と三三九とハ二
 比二に四とハけて八とハ即九分の内八
 をとハハ是大簇長八寸とハ也或ハ二
 乃二と一を三寸とハハ此寅比八と

三八二尺四寸也 是其實に四とハ第の
 法扱をきと三とハ除ハ八寸とハ也 是
 三分一を益ハ算術四因三歸の法也云也
 次小卯二十七分十六とハ寅の九分と
 三をかくて三九二十七也 下比十六寅の
 下比八とハ倍加して十六とハ此十六の内
 くと三と一とハ三とハ五十五と五寸と
 残一を三分とハ是則南呂長五寸三
 分と知也 辰比八十一分比六十四とハ
 卯の二十七に三を掛けて八十一分とハ
 下比十六とハ四を掛けて六十四とハ成此六
 十四の内九を一とハ七九六十三と
 七寸とハ引残一と一分とハ事始洗の長七

寸一分と知也余律相生を以ててあるべし但陽下は陰を生ず。此の分の字以下此數試倍し本律を三分して其一を損かり陰上は陽を生ず。四をかり本律を三分して其一を益なり是黃鐘九寸より以下十一律を生ず。此法也子寅辰午申戌六陽辰は皆下生なり丑卯己未酉亥は六陰辰は皆上生なり但下生上生上の声を去はるす六陽辰は下の聲を生ずる六陰辰は上の聲を生ずる六陰辰は其衝は居大とへし林鐘は對衝の末に居也其林鐘南呂應鐘の三呂は陰方に在りへ増損すれども其大

呂夾鐘仲呂は三呂は陽方に在りへ倍數を用すきに十一月の氣と相應を蓋陰の陽にあくく自然此理あり注よいとく未は一千二十四た、大呂半律の數を得酉八千一百九十二止に夾鐘半律の數を得亥六万五千五百三十六止に仲呂半律此數を得とくさるるを陰及て陽して陽及て倍を以てすや云々

十二律其實

- 子黃鐘十七萬七千一百四十七
- 全九寸 半無
- 丑林鐘十一萬八千九百十八
- 全六寸 半三寸不用

寅太簇十五万七千四百六十四

全八寸 半四寸

卯南吕十，萬四十九百七十六

全五寸三分 半二寸六分不用

辰姑洗十三万九千九百六十八

全七寸一分 半三寸五分

巳應鐘九万三千三百一十二

全四寸六分六釐 半二寸三分三厘不用

午蕤賓十二万四千四百一十六

全六寸二分八厘 半三寸一分四厘

未大吕十六萬五千八百八十八

全八寸三分七厘六毫 半四寸一分八厘

三毫

申夷則十一萬。五百九十二

全五寸五分五釐一毫半二寸七分二厘五

毫

酉夾鐘十四万七千四百五十六

全七寸四分三厘七毫三絲半三寸六分六

厘三毫六絲

戌無射九万八千三百。四

全四寸八分八厘四毫八絲半二寸四分四

厘三毫四絲

亥仲吕十三万一千。七十二

全六寸六分八厘三毫四絲六忽餘二毫

半三寸二分八厘六毫二絲二忽

愚按算法黃鐘比實一十七万七千一百四

十七を三分の一を去て殘二分十一万八千。九十八是すなまら林鐘の實なり次、太簇と生す林鐘の實を三分の一を益て十五萬七十四百六十四となり是則太簇此實なり次に南呂以下上下相生の損益同准へて知へし律呂新書の注、朱子云十二管八を隔て相生す黃鐘の管より陽より下生し陰皆上生を蕤賓此管より陰及て下生し陽及て上生す以て天地此氣不象なり若言法、かくりて陽を以て必下生し陰必ず上生すること成んは是をもて氣を候ふ事氣應せしことを以て樂を仰て樂和せん皆鄭氏、重上

生此法不易此論よりゆゑんかり學者こそを以て此を求るときら得こやわらんとも云々按ずれば子黃鐘より巳仲呂に至りては陽方なり故に陽律陰呂を生す然る皆下生す午蕤賓より亥應鐘に至りては陰方なり故に陽律陰呂を生すより皆上生すこと知へし上生と云は長管を生を上生と云長管より短管を生と下生と云なり亦云仲呂は十二律此終より仲呂此實十三万一千七十二と三にりゆふ二算を法らば其數行す此律此十二止るゆゑんかり律法全寸全分全釐全毫全絲を得者を正律とん忽按あはりの不

盡法算とて不盡は二算や三を以てこ
 とを以ては二分を除き不盡の一算
 之餘一分也惟律管長短忽枚あるのこ
 あつた不盡算して空の如くみ此内の
 積も亦忽微あり不盡算者いよる空
 の圓の内はけりりの忽微毫なり

變律

黃鐘十七万四千七百六十二八分四百
 全八寸七分八厘一毫六絲二忽不用
 半四寸三分八厘五毛三絲一忽
 林鐘十一萬六千五百八分三百
 全五寸八分二厘四毛一絲一忽三初
 半二寸八分五厘六毛五絲六初

太簇十五萬五千三百四十四十分四百
 全七寸八分二毫四絲四忽七初不用
 半三寸八分四厘五毛六絲六忽八初
 南呂十萬三千五百六十三十分四
 全五寸二分三厘一毫六絲一初六枚
 半二寸五分六厘七絲四忽五初三枚
 姑洗十三万八千八分四十
 全七寸一釐二毛一初二枚不用
 半三寸四分五厘一毫一絲一初一枚
 應鐘九萬二千五十六分
 全四寸六分七毫四絲二忽一初枚餘
 半二寸三分三毛六絲六忽六初疆不用
 按すに十二律相生常八思ふ、黃鐘

始て仲呂、終仲呂、復黄鐘を生し、輪環し
て、無窮無尽也。是甚俗傳、其誤僻說なり。
實を十二律相生、進て加へらば、黄鐘、小呂、
大呂、仲呂、小終仲呂、極て始て、
へらば、強て生ず、ゆるゆる、此律正黄
鐘、少を少し、其色高し、以下林鐘、太簇、南
呂、姑洗、應鐘を生ず、此に隨て、同く高し、各
正律、あらざる、少を變律と云
なり、蔡元定云、十二律各自為宮、て以て五
色二変を生ず、其黄鐘、林鐘、太簇、南呂、姑洗、
應鐘、六律、八則能具足、難賓、大呂、夷、則夾
鐘、無射、仲呂、六律、一則黄鐘、林鐘、太簇、南呂、
姑洗、應鐘、六律、此声を取、少、下、して和

世に故、變律あり、變律、其声正、近く
して、女し、正律、ゆるも、高き也、云々、詳、八
十四色、此圖に、く、こ、を考知へし、算法云
仲呂、此實、十二万一千。七十二を三に
目、是、不盡、以、二、算、既、行、極、々、す、然、共
當、以、て、通、す、ら、也、有、へ、し、律、變、す、ら、
者、六、あり、故、一、を、置、て、六、た、ひ、三、を、く、
れ、七、百、二、十、九、を、得、此、七、百、二、十、九、を、以
て、仲呂の實、一十三万一千。七十二に
加、て、九、千、五、百、五、十、五、万、一、千、四、百、八、十
八、と、な、る、を、以、て、三、分、一、を、と、り、て
再、黄、鐘、を、生、じ、其、三、分、一、を、益、と、り、數、一
萬、二、千、七、百、四、十、万。二、千、一、百、九、十、八、四

とすは是を又七百二十九にり付是は
黄鐘の實一千七百四十七百六十二分
八十成なり以下皆此例あり知し蓋應
鐘の實六十七百一十。萬八千八百六十
四を三より其數不盡此一算行を
らす此変律は六本止るゆゑんなり
變律ハ正律よりあらは其声正律より近して
少高なり故に宮とせざる也只正律は補
なりたるとハ閏月のこを也閏月の正
月とありすといへとも潤なきは年
をなすは變律より曲調不成也扱黄
鐘太簇之變律全声と不用とあり他律
乃為に校せらるるに全色を用とあり其

声宮より太く濁して君凌々音色と成
故必半声を以て用へり也又應鐘半色を
不用と有ハ應鐘ハ管極て短色極て清ハ
他律は役と成ても全色を用高倫と相奪
義加つて無之ゆへ半色を用と無より
故樂用と云也正律之黄鐘ハ君は位宮色
之根元也故に他律のたはり役せらるる
變極て無かり由是て半色より用
こが半色ハ不用とあり前扁之十二律ハ
實の所見へり是皆調声之法律ハ律
呂新書礼記之樂記の注文等に見へり
今按る黄鐘宮ハ天子ハ位余律宮ハ國王
諸侯の

五聲 因律呂新 一曰五音

宮色八十一 高声七十二 角声六十四

徵声五十四 羽色四十八

按算法黄鐘比數九九八十一是を五色比
本より三分の一を損て下り林鐘を生
す是を徵色とす也林鐘を三分の一
太簇と生す是則高色也太簇を三分一損
て下り南呂を生す是則羽声也南呂を三
分一益て上に姑洗と生す是則角色也此
角声のより六十四に至るは三分に
不盡此一算數よりつゞかれたる声比
より五に止り也但此変黄鐘一均五
声はよりを云へる他律にかゝるていふ

らば其算法本律比實を置て九々を以て
三分損益して五色を生し扱
再本律乃實を以て割つてしに則固り
八十一高亦七十二角亦六十四徵亦五十
四羽亦四十八兵云々たへは應鐘を宮
置て八十一にりりれは七百五十五万八
千二百七十二と得是を宮とす扱九万三
千三百一十二を以て割つてしは八十
一と成也次に宮比數七百五十五万八千
二百七十二を三分の一を損て五百〇〇
三万八千八百四十八と成是を徵らば應
鐘の實九万三千三百一十二よりりつ

してハ五十四とある也次に徴を三分一
 蓋て六百七十一万八千四百六十四とある也
 を高とす應鐘其實九万三千三百一十二
 に割てハ七十二と成次に高を三分一損
 て四百四十七万八千九百七十六是と羽
 とす應鐘其實九万三千三百一十二にわ
 せハ四十八と成次に羽を三分一損して
 五百九十七万一千九百六十八とある是
 を角とす應鐘其實九万三千三百一十二
 と以て羽よりつむを六十四とある也

變聲

變宮声四十二六分

變徵色五十六八分

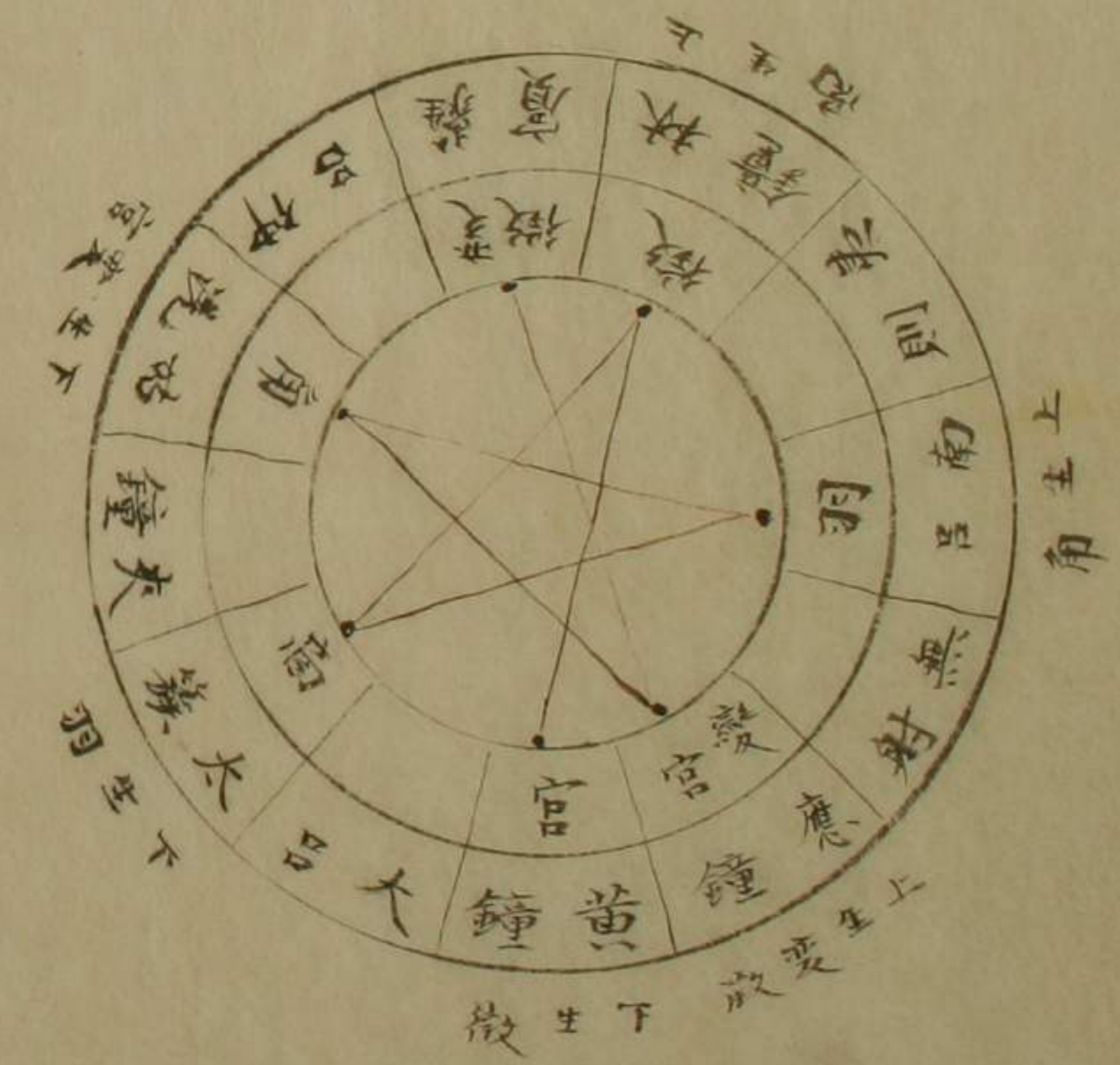
五音者宮商角徵羽是也其次第宮与高々
 共角徵共羽ハ各一律を隔る角と徴と
 羽と宮とハ間ハ二律と隔一律をへつ
 るハ則音節相和ハ二律をへつるハ則
 音節遠ハ故ハ角徴ハ間徴又近く一色と
 収むと徴少ハ下ゆハハ水を變徴と云
 羽宮のあハ宮と高々ハ一声を収ま
 少宮ハ高ハ愚按少ハ宮ハ下ハ云ハ
 意得ハ故にこれと變宮と云ハ里變徴變
 宮宮ハ宮と高々ハ徴ハ徴と高々ハ古人
 此を和綴と云へ里云ハ宮ハ宮と高々
 此徴ハ徴と高々ハ云ハ正宮正徴又あ
 らざるハ調へと高々ハと也高々ハと

川曲調此夏也律呂新書の六十調此圖
て考合す然し變徵變宮を五音此不及を
濟ゆえん有り故に塩梅色とり名づく美
塩梅にあらざるを其味さるのちらざる
如く樂曲も亦塩梅色にあらざるを其
曲節相和せし五音に二色を加へて七色
と凡管絃音曲音詠声明等、之此七声と以
てこれとをさるる也塩梅此義詳く樂書
要録に見へる七色曲調の辨つまはら
るに愚撰曲調傳に是を注するゆへ茲
小贅せしむ

發するす當り以てこれを通するも有也
此變を二ツ故に子の一を置て兩度三を
かけ終り九と成也此を以て角色のす
六十四小如く是に五百七十六となり三
分の一を損て三百八十四是を九とて
此に四十二と成但余數六ありこれを日
らとて小分六と云なり是則變宮声と
すもの也此變宮の三百八十四を三分
に其一を益加て五百一十二と成是を九
小分とて五十六小分八と成是則變徵此
數なり故に此變徵はす五百一十二を三
とて又二算をつまると其數行と
此變色の數二と止りん也

七声相生圖

此圖黃鐘
一均七色之圖
也他調准之可
知之



五声大小尊卑之次第

宮為君高為臣角為民徵為吏羽為物
礼記樂記の注劉氏曰五声之本ハ黄鐘乃
律より生々其長九寸每寸九分九々八十一
是を言色の數と寸三分一を損て以下に
徵と生す則二十七を去て五十四と得也徵
三分の一を益て以て上に高と生は則十八
を加て七十二を得なり高を三分一て一
と損て以て下に羽を生す則二十四を去て
四十八と得なり羽と三分一て一をぬし
て以て上と角を生は則十六とくへて六
十四を得也角色の數三々分之二不盡二算
其數行を故と色五と止るれ相生の次

ナリ宮ハ土に属す絳ハ八十一絳をもち
最多ク而て声至ラ小なる五声小カウテ
独尊シ故ク君の象ナク高ハ金にそクを絃
ハ七十二絳を用テ声次ハ濁る故ク君に次
テ臣のカナラシク角ハ木にそクを絃六十
四絳をもちして色半ハ清半ハ小ハ独五
声ハ中に居故ク臣小トシテ民の象ナク微
ク火にそクを五十四絳を用テ其声清氏
アリテ後小変アリ故ク寺のククも羽を
水にそクを絃ハ四十八絳を用テ最次を
以テ而色ソウリテ清変アリテ而後ク物をも
ちゆ故に物の象ナク其大小の次也五
声固に黄鐘ハ宮なるに本つく然とも還テ

宮ト相為トスハ則其餘十一律ハ宮トモ
ハハ宮ハ必ず君トナリテ臣に下るハ
ナラシク高ハ必為臣ト君に上るハ角ハ民
薇ハ事を物皆次を以テ降シ殺其臣君ト
過民臣トナリ変民トナシ物事にすくる者
ありトキハ則正声を不用シテ半色を以テ
應之此ハ八音克諧ト而倫を相棄トナシ
えん也然テ色音之声ト政ト相通ス君臣民
事物ハ五者各其理を得テ而不乱トキハ則
声音和諧トテ怡懣ナクハ怡懣トキハ故敗也
宋蔡元定ハ律呂新書の注ハ潛室ハ陳氏ハ
以テ五色大小之相次固ク黄鐘の宮ナラ
に本つく若ク五色旋リテ宮ト相為トスハ則

十二律と宮と角と商と羽と徴と黄鐘を宮とと
るのこにわらわら如應鐘を宮ととととと
ハ則大呂を商とと夾鐘を角とと蕤賓を徴
とと夷則を羽とと皆不然と云ととととと
この中に當り高と低へきり或は下り當り下
にへきり或は高して倫を奪ふ如患あり
故に此五象を立て以てこれと調ふ宮ハ必
君と多して臣にをさるへうがた高ととと
らん臣となして君にあるるへうがた若く
き民若一事若一物とと次かり高降殺へし
律の中半声を以て相應する者ありととと
蓋以て其臣或は君と過民或は臣にすぎ物
或は変りすぎふいへ正色を不用して半色

を用て以てこれと應はるべき八音ととと
のよて倫と相奪さるゆゑんなりと云々
昌名謹按に調声之法五音大小之次第と
君臣民吏物の五象と配し尊卑と立て宮
音必太く高角徴羽次第と以て細くし倫
と相奪されやうにす也林鐘を宮とす
らと或は太簇と徴とは是宮清て最濁如く
仲呂と宮とすとすと黄鐘と徴とと林鐘と
高とと太簇を羽とと南呂と角とと十二
律相生に往てり往てり再生は黄鐘以下
こが正律より少高して変律とと仲呂ハ十
二律ハ終故に高角徴羽四色こが以て變
律なり且又徴羽ハ色宮声より大なり是其

大小の序こゝにて倫と奪の音なるゆへ
其太を濁者と減して変半色を用て以て
之れと調ふ是と調声此肝要とす然る義
かり然とつへとも此義詩詠音曲こゝにい
高いも相調へし楽曲こゝはわて身自由
に調うへし故如何とすれも一此器を以
て數色と具し一此器を以て數調の曲吹
横笛こゝに黄鐘調盤涉調双調こゝ此樂を
吹し五音此大小順こゝ吹とて高以下
乃音を細せんこゝ皆責吹宮音こゝ必
太くせんこゝ腹良吹こゝ人々責吹こゝ
吹こゝ尤半色こゝ准すこゝ吹こゝ及
て其曲節調こゝ所詮五音此尊

卑い曲節こゝ其法ありて宮い必宮こゝ高い
必高いたい此声音と吹こゝを自法あり
て存こゝ詳に愚者曲調傳こゝを解す樂
書要録こゝ尊卑い宮高い清濁い
宮清いとい尊い高濁いとい
卑い有此論こゝ明證也仍こゝ其本文
左こゝ寫こゝのい

○凡律呂布在辰位自以長短清濁為大小后
立均調則隨宮高為尊卑亦不均以長短清濁
故宮未必皆濁羽未必皆清

注云凡管長則色濁短則清假令夾鐘之宮
黃鐘為羽夾鐘短於黃鐘則是宮未必濁黃
鐘長於夾鐘則是羽未必清無射宮以黃鐘

為高亦宮清而高清濁之類是也私云立均ト
及徵ハ羽反宮也七也
ヲ云也曲調トハ壹越調平調等ノ調ラハス

蔡雍月令章句曰琴堅其絃則清緩其絃則濁
琴前其柱則清却其柱則濁故知清濁者一絃
之緩急也與尊卑之差宮高者五音之唱和也
有君臣之別唱不必濁和不必清尊卑擊于宮
高不由清濁

注云宮為君高為臣無射為宮雖清而尊黃
鐘為高雖濁而卑如此則宮不廢清高不廢
濁也

第十聖武天皇續日本記天平七年同辛亥
入唐留學生從八位下上道朝臣真備獻唐

禮一百三十卷大衍曆經一卷大衍曆立成
十二卷測景鐵尺一牧銅律管一部鐵如方
響馬律管声十二條樂要錄十卷云々以下
文畧之

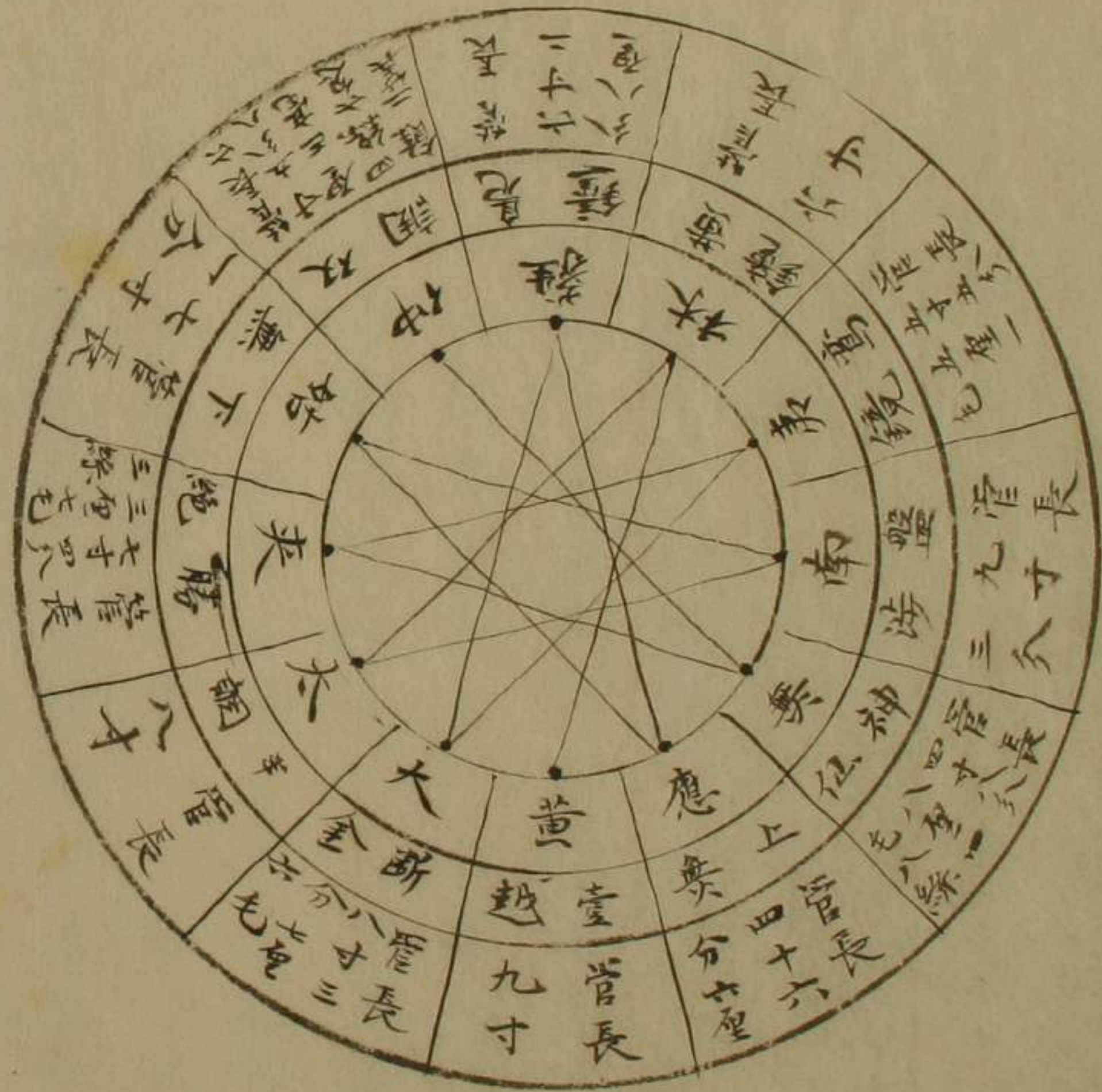
八十四卷

第七声	宮	高	角	變徵	徵	羽	變宮
第一宮	黃鐘宮 (正)	太簇 (意)	姑洗 (正)	蕤賓 (正)	林鐘 (正)	南呂 (正)	應鐘 (正)
第二宮	林鐘宮 (正)	南呂 (正)	應鐘 (正)	大呂 (正)	太簇 (半)	姑洗 (正)	蕤賓 (正)
第三宮	太簇宮 (正)	姑洗 (正)	蕤賓 (正)	夷則 (正)	南呂 (正)	應鐘 (正)	大呂 (正)
第四宮	南呂宮 (正)	應鐘 (正)	大呂 (正)	夾鐘 (半)	姑洗 (正)	蕤賓 (正)	夷則 (正)
第五宮	姑洗宮 (正)	蕤賓 (正)	夷則 (正)	無射 (正)	應鐘 (正)	大呂 (正)	夾鐘 (正)
第六宮	應鐘宮 (正)	大呂 (正)	夾鐘 (半)	仲呂 (半)	蕤賓 (正)	夷則 (正)	無射 (正)
第七宮	蕤賓宮 (正)	夷則 (正)	無射 (正)	黃鐘 (半)	大呂 (正)	夾鐘 (正)	仲呂 (正)
第八宮	大呂宮 (正)	夾鐘 (正)	仲呂 (正)	林鐘 (正)	夷則 (正)	無射 (正)	黃鐘 (正)
第九宮	夷則宮 (正)	無射 (正)	黃鐘 (正)	太簇 (正)	夾鐘 (正)	仲呂 (正)	林鐘 (正)

第十宮	夾鐘宮 (正)	仲呂 (正)	林鐘 (正)	無射 (正)	黃鐘 (正)	太簇 (正)	姑洗 (正)
第十一宮	無射宮 (正)	黃鐘 (正)	太簇 (正)	姑洗 (正)	仲呂 (正)	林鐘 (正)	南呂 (正)
第十二宮	仲呂宮 (正)	林鐘 (正)	南呂 (正)	應鐘 (正)	黃鐘 (正)	太簇 (正)	姑洗 (正)

按十律八十四色是則十二調也變徵變宮
 二十四色を除くとき則所謂六十色也律呂
 新書云律呂此と往てへらす故小黃鐘
 復他律此為り役せられと所用之七色と
 正律ありて空の法りり忽徵を林鐘より
 下ハすより半色あり注云大呂太簇ハ
 一半色夾鐘姑洗ハ二半色蕤賓林鐘ハ四半
 色夷則南呂ハ五半色無射應鐘ハ六半色仲
 呂ハ十二律此窮たりといハ三半色云々蕤賓

云也其圖左載之



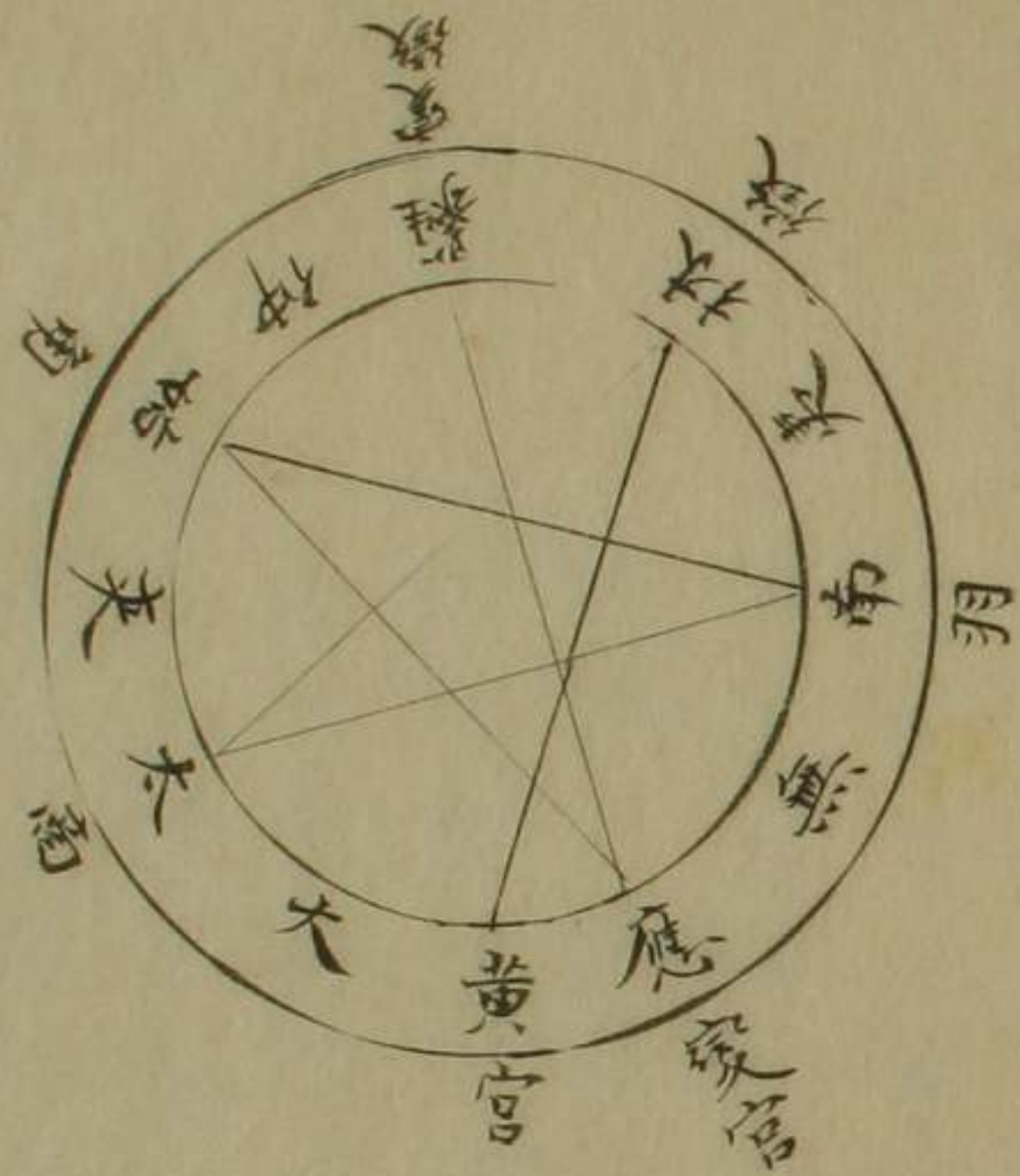
七色次第有呂律之差

律七声者其次第宫高即高角徵羽即羽也呂
 七色者其次第宫角變徵羽變宮也律調之
 變色者高羽之角也故之嬰高嬰羽之名或
 變高變羽之名也呂調ハ變色宮徵之
 あり故に變徵變宮と名傳くる也角色にお
 いてハ變色なきハ獨其位を異に故に
 呂角律角と稱す也所謂呂角ハ律角之對
 一と言ふ其位一律前之ありて其色下
 し所謂律角ハ呂角ニ對す其位一律後之
 ありて其色高也律七声相生ハ次第ハ宮生
 徵之生高之生羽而羽の次ハ不生別に宮之
 角逆之角之生角嬰羽之生寸嬰羽之生嬰高

と生は但序を以て言ふは如也實ハ皆
 順生ならざるをあらはし嬰高より始て相
 生してはるるが如し則羽に至るては順生ハ
 色と成詳し圖をもて知へし呂七声相生の
 次第を宮より徴と生徴より高と生し高より
 羽と生羽より角を生し角より変宮を生
 し變宮変徴を生は詳し圖と以て知へし

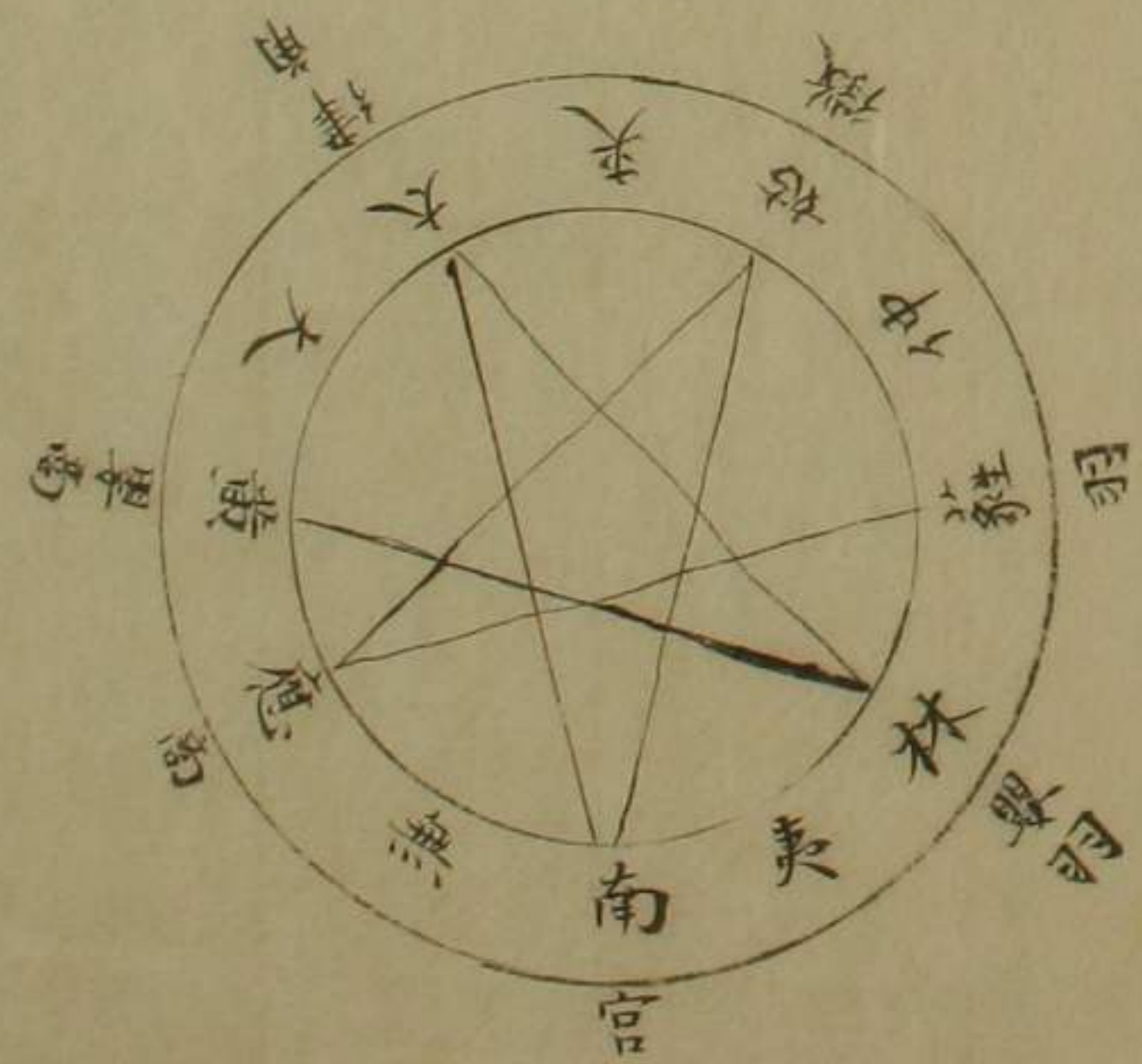
○ 呂七聲圖

以壹越調圖
之他調准之



○ 律七色圖

以藍涉調圖
之他調例之



一律有三色

樂書要錄曰夫声折半及倍加只是一声但清濁異年凡聽共曉不待知音欲以數求但及損益上下之術也唯以三分率之則得折倍色也昌名謹按字下聽字之下共字疑然也其者字下之字又待字此下之數字有へかゝ聽字ハ耳さきとと心耳乃さき記変也然ハ耳さきと記り此を曉くして數をさきととと音を知との義をたし音を知との音律の道と耳をりて明らる極志ハ或ハ此声ハ太簇彼ハ南呂とあるるなんと慥々毫髮もたつたす聞知り此を其相生の色教を以てさわらうとあよ

とを耳を以てさきと知る且萬変を聞けりなき善惡を聞さし類古者其人ありしやこれ者と聽者といひなりきりなり六律を以てさきと知ふならん何より由て萬変を聞さしとへき古師曠と云く聽者ハ心を會して高蟻のいんさあるときし知ふやとの人なれとも六律を以てさきと五音を正すをさきとと孟子も仰らるる也聽者なり者といふへき數を以て其色を求へし其善法上生の色強て下生せしむる倍加声と成なり故小損益上下の術と及す也云ハ假令ハ黃鐘九寸三分一を損して

下に林鐘六寸欲生す然る林鐘と倍加声
 小せまく欲さる則黄鐘九寸を三分一減
 ませ一尺二寸と成是則上生之林鐘也
 又林鐘六寸を三分一を益て上に太簇と
 生す其長八寸なり然る太簇を半色し
 せゆを欲し林鐘六寸を三分一損す
 を四寸と成さる則下生れ太簇也以之
 此意を按するに凡一律三色をうり
 所謂倍加声折半正声是也倍と云れ甲乙
 順と云也甲と云い折半色乙と云者ハ倍
 加声順と云ハ正色也此三声諸の樂およ
 い詩詠音曲声明等に用いそんハあまへ
 鳳笙秦箏瑟の件の三声と具ぬつよ

ひらふ左よと記す但五重此圖竹と
 て五重の声もあを其色ハ乙の乙甲の甲
 けり乙の乙とい倍は倍又林鐘一尺二寸ヲ
 付ハ甲の甲とい小半声也此三声を倍半
 正の三声と加へて五重の色といを記す
 甲乙れとも倍半正の外倍は倍半の半
 色も用事なく只其色も相生す云こと
 をあらわすのこ

笙竹音

凡竹	正黃聲	上竹	半黃聲	比竹	正無射聲	言竹	正應色鐘
一竹	倍南呂聲	七竹	正南呂色	工竹	倍應聲	行竹	倍林色鐘
十竹	正仲呂色	美竹	正蕤賓色	乞竹	正林色鐘	千竹	半林色鐘
乙竹	正太簇聲	八竹	半太簇聲	下竹	正姑洗色		

箏調 以太食調呂記

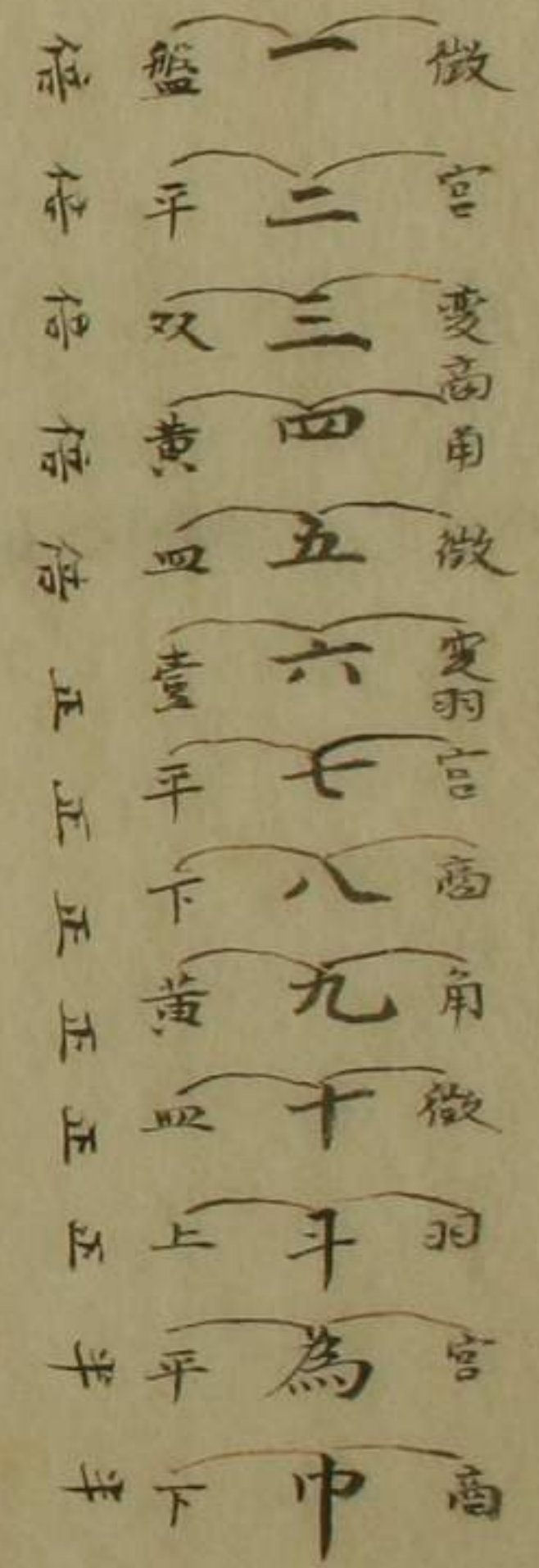
盤	一	徵
平	二	宮
下	三	商
肩	四	角
盤	五	徵
上	六	宮
平	七	商
下	八	角
肩	九	徵
盤	十	宮
上	斗	商
平	為	角
下	中	徵

昌名謹按すに夫律算三分損益の法天
 理自然の數を以て聖人の造をせらる
 妙術也諸の管絃も通してをのつ
 三分損益法をさす云々
 樂書要録曰琴長短を擇す但一の絃
 を調へりて黃鐘と同色即其上に
 おいて分て三分と作て一分と捨却て
 而してと彈す即六寸此林鐘聲と合又中
 にかいて更に三分に作て一分を
 ちしてと捨ていすかよら八寸の太
 簇と合如此辰轉して十二を終ぬ律呂
 と相まらひて遂に毫厘の差す琵琶尺
 八横笛のたらい直る亦これより人

て明_二知ぬへ_一三分損益此算教相存す
る_一理自然より出て造作_二の_一ありあ
らんと云々予此明論を以て今秦箏此表
らんを按するに假令太食呂調より先
二絃を平調此圖竹よりあらへあ_二せて
宮音と_一次_二五絃を假_二二絃の宮音と
同音とあらんあり_一て龍角のき_二り
柱の立所_一を何尺何寸何分あると正
しき尺より極_二て_一と則三分_一
損去_二て其二分_一何尺何寸何分何厘ある
と委細_二小き_一免置きて柱を立改れ_一則
盤_二湊の音と成_一れを徵音とす二五_一絃
調畢次_二三絃をあら_一ふ前の_二と_一五と同

音に立て_二を_一三分_一一_一て柱を立あ
ら_二め_一下無_一と成_二是則_一高音_一は次小
三分_一一_一を去_二て六絃とあら_一ふ是則羽音
は次_二六絃の_一色三分_一一_一弦_一て四
絃を調ぬ_二是則_一角と_一次_二二七三八四九
五_一十_一の_二二_一絃_一二尺四寸_一柱あ
ら_二七_一絃_一一尺二寸_一なり是も假_二七_一絃
を二_一と同音_一て其寸尺を半減_二す_一
一三八四九五_一十八_一中_二六_一斗_一同_二新_一なり
亦平調の律あら_二め_一逆_二生_一れ_一あら_二ゆ
へ_一呂調の_二三分_一損益_一法_一より_二て
い_一あら_二別_一左に_二あら_一る

平調



按すに古此調ハを押して嬰商と一斗
 を押して嬰羽と其調の次第ハ先二絃を
 宮として平調乃圖竹よとを名らへあ
 せて次小五の敷を名らゆ也但其五絃
 絃を先假し二と同音に柱を立て其尺寸
 何程を正し身尺よとを名らゆ其三分一
 去て柱を立て改まハ盤渉と成なり次ハ四
 此絃を二と同音に立て其長何尺何寸あ
 るを四分一損去て柱を改立れハ黄鐘の

音と成是則律角なり此角二の宮音より
 遂に生ずる音ゆへ四分一を去也次ハ六
 絃を四と同音に立て見て其尺寸を四分
 一より柱を改立まハ音越音と成是
 を嬰羽と逆生の名也次ハ三絃を六
 分同音に立見て其尺寸を二分一を四
 分柱を改立れハ双調音と成是を嬰商と
 名逆生なりと名らゆ正色より倍色を生
 せと名らゆゆへ二分一を去て名らゆ次
 ハ五の徽よりハ此高を生す是又五八同
 音に立て見て其八の絃ハ尺寸を三分一
 去て下無音と成是高也次ハ四九五十七
 為八中ハ此く同音なりて半減小する也

其九、四の半に立十、五の半に立中、八の半に立也。次、八の半高を以て斗、此羽を去る、三分一を去て柱と立るに斗、絃上無音と成次に一と去らば是五と同音と立る也。他調例之、一て知へ、詳愚持管、絃教録載之。

後漢京房六十律相生次第出津呂新書

仲呂生執始子	去滅生時息寅	結躬生變虞辰	逢内生盛變午	分否生解形申	閑時生閑掩戌	南中生丙盛子	安度生屈齊寅	歸期生路時辰	未育生離宮午	凌陰生去南申	族嘉生鄰齊戌	內負生分動子																																
黃鐘	林鐘	南呂	應鐘	大呂	夷則	夾鐘	無射	仲呂	執始	去滅	時息	結躬	變虞	逢內	分否	解形	閑時	閑掩	南中	丙盛	安度	屈齊	歸期	路時	未育	離宮	凌陰	去南	族嘉	鄰齊	內負	分動												
子	寅	辰	午	申	酉	戌	亥	子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥	子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥	子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥	子

仲呂生執始子
去滅生時息寅
結躬生變虞辰
逢内生盛變午
分否生解形申
閑時生閑掩戌
南中生丙盛子
安度生屈齊寅
歸期生路時辰
未育生離宮午
凌陰生去南申
族嘉生鄰齊戌
內負生分動子

執始生去滅未
時息生結躬酉
變虞生逢內亥
盛變生分否丑
解形生閑時卯
閑掩生南中巳
丙盛生安度未
屈齊生歸期酉
路時生未育亥
離宮生凌陰丑
去南生族嘉卯
鄰齊生內負巳
分動生歸嘉未

屈齊
 隨期
 形晉
 夾鐘統平三律
 閑時
 核嘉
 爭南
 始洗統辰五律
 南授
 變虞
 路時
 形始
 依行

仲呂統己三律
 南中
 內員
 物應
 蕤賓統庚四律
 南夷
 盛變
 離宮
 制時
 林鐘統未五律
 謙待
 去滅
 安度

と生せし考てお建試六十
 律とす新之但其三分損益
 乃月出有不盡の異を或案
 或増より又仲呂と生して
 正鐘とより以京度に見る
 別是なり將て四十二律を
 生ん多お云ふは是變律と
 相六に止る自樂し出たる
 一と一様と云はれし加ふ
 厚くしん強く云はれ加ふ
 としんとも亦用收く云ふと
 才義理と云ふさるなり況
 や律字の微妙いす類と世

法と云ふは西と毫毫極忽
 と間とあり今す多しと不
 盡此算損益と云ふは
 と以て遂と或は云ふを案
 あるはいれと増と或は則
 其時贏贅虧とてあると云ふ
 とは積目と亦は力律とす
 とと故と又依り衣にあり
 とや上包育と生と云ふは
 乃次に海を多しと云ふは
 濁其黄鐘林鐘を核南呂此
 洗をたのくは律と統離廣
 應鐘のちのくは四律とす

歸嘉
否與
夷則統申三律
解形
去南
分積
南呂統丙五律
白呂
結躬
歸期
未卯
夷汗
無射統戌三律

閉掩
鄰夙
期保
憲鐘統庚四律
分鳥
運內
東育
運時

大呂夾鐘仲呂夷則各射五
在形之律上三之五
用之其多寡例之其
次牙之十之律仲呂
及之正一之黃鐘之生
やうめす了間と共其律
の月終受ふ五六十歩は
た之相去再々あり百里
とありふ多々変て
やうめす了間と共其律
の月終受ふ五六十歩は
た之相去再々あり百里
とありふ多々変て

之數小令せし
殺之自然とて律とあり
者之増へて而林とあり
つて之減益とて
らるる何れも
素房の
乃然とも取天も劉焯も
みん林鐘ら下於十一律之方
とゆつて仲呂及て黃鐘を
生るる
あり百四十七之數を得て九
可也
欲す如以

黄鐘一律... 西律...
その他十一律...
益...
又...
因...
日...
...

候氣

律呂新書曰後漢志候氣之法為室三里戸閉
塗罽心周罽布緹縵室中以木為按每律各一
内卑外高從其方位加律其上以葭葦灰抑其
内端按曆而候之氣至者灰去其為氣所動者
其灰散人及風所動者其灰聚云々

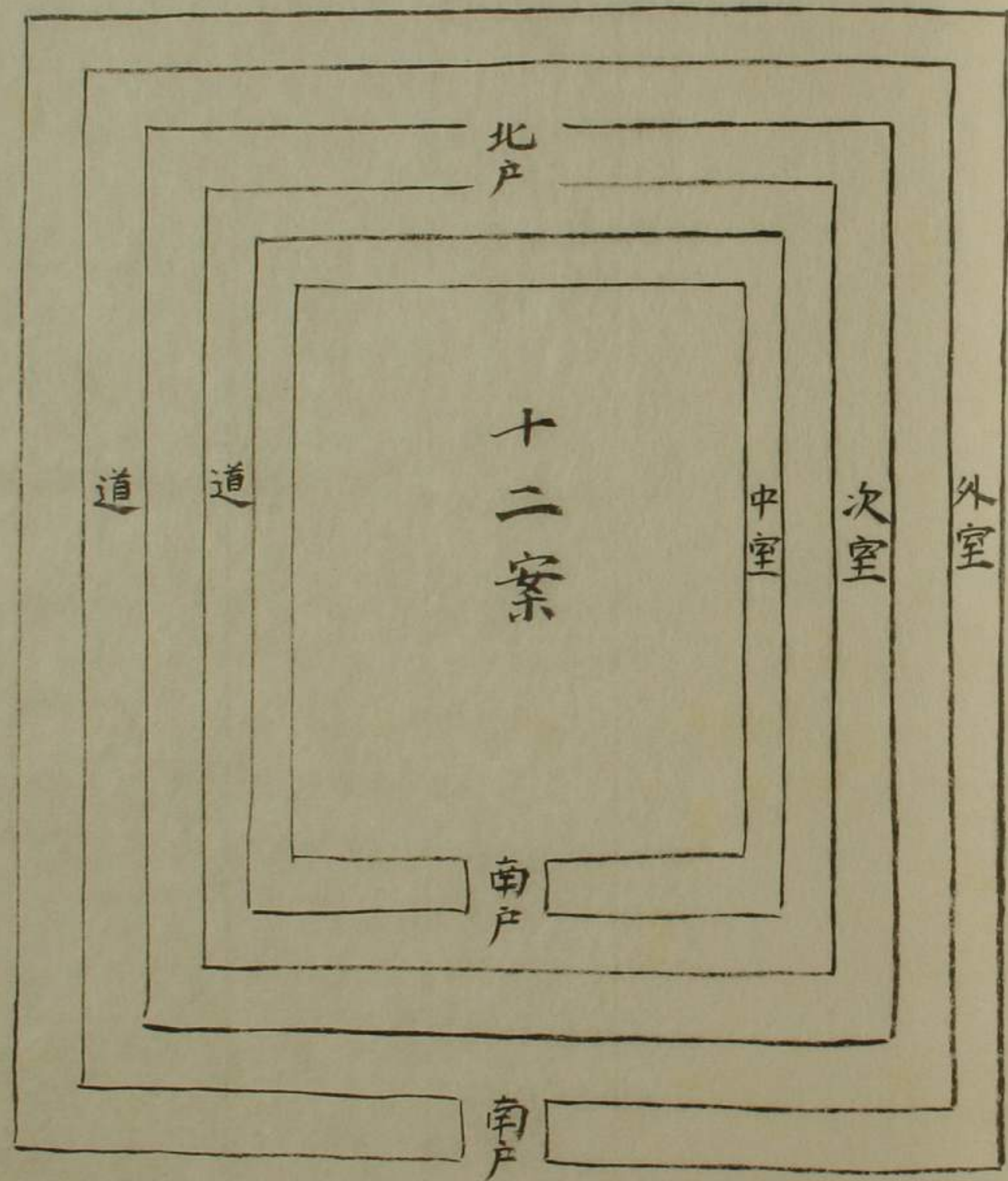
昌名謹と諸書と参考す々に候氣三重之
室其御く里や母外室ハ入口南戸次室ハ
入口北戸中室ハ入口南戸すれ包室の
惣躰三重共に上圓く下方方くて壁小す
多々見へたり寡と惣れとを藏の戸を閉
るぬれとく小透間を多やうにぬる外又
里風氣の入るる處にする夏冬へし

周密と云も室れめらるるをさしりしを毫髮
も何方か透間うやうふと云もさる
へし縵字ハさむらりとさむ幕のやうふ縵
と布張し見へあり縵ハ赤色黄し漆た
る練縮とあり以木為案とハ案ハ漆をえ
と訓ハ木ハ案はくえ十二ありら其案
内卑外高をきて其上に律管をくく置
て亦位は従とて黄鐘管ハ北方子位註實
ちりハ南午位は置を云也案の形象を圓
厚也底中は孔とふして霧を白とあり葭
草を焼灰しして律管此内の端は入抑る
と也唇を按とハ黄鐘ならハ冬至一陽未
復此即太族ならハ雨水夾鐘ハ春分如此

月々此管より何れ刻り其節季入やをか
んらん置て其刻々にこれをうらんとの
事をら下し人及風とハ一本は人衣風と
あり人ハ衣服のあり風ありは旋風
とてまり風生に此風のたれは動さる
まハ灰必ず聚との也律を候者中気前
後五日此内はかいて明日室中に燈して
其月気應す然や否やを視たり神を安し
性を調へて奉動する儀を以ては謹す
んハありへらるる一説云律呂此管
を十二辰此位は隨て按上は代は出を以
て埋て上を地と平しして管中は葭草
灰を實入輕き絶素をもつて律管此口を覆ひ

月氣至應すとて灰飛素と衝るこがて外
一散出たり而も氣此應すと早晩ある
灰飛ありて或も初て月入て
其氣應し或も中旬下旬之間に
氣始て應すとあり或も三五夜
して盡るあり或も月を終て日
少許をたわむる又氣をうか
ふに説々あるも冬至夏至之
二至を以て以後遠く定
る説後漢のころよりして
論とすとも慥に證據なき
を咄を云つて人たるや其
書を信せざる書なきと孟子
御言

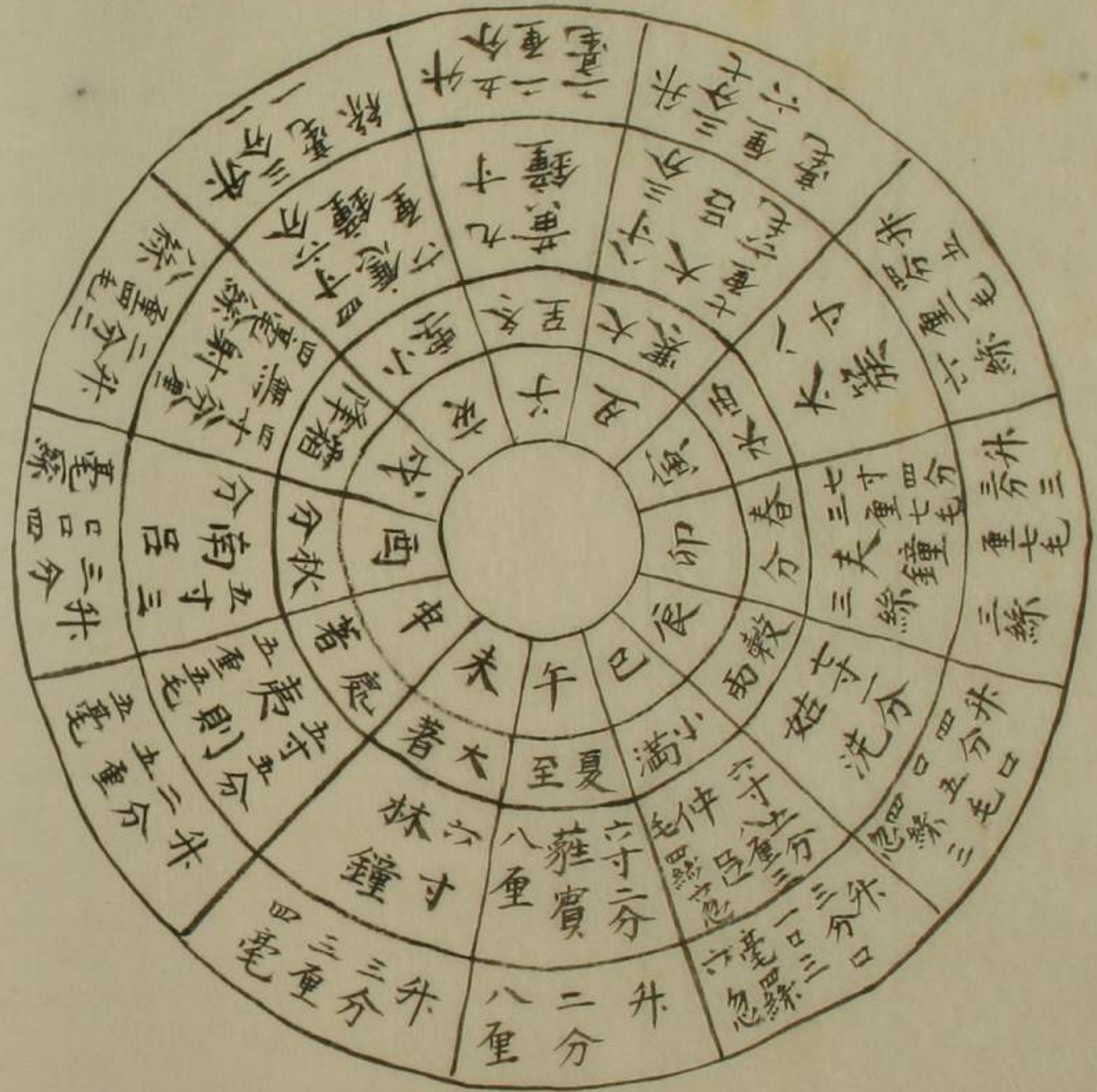
此通りに心得てかかれば信すへ
この明論詳に張氏の律原を見
論文に云夫一歳の氣昇り降り
り天氣ハ上并地氣ハ下降閉
陰とあり秋冬此也升者ハ此
ハくたを管を地に埋て將に誰
とんとする天氣下降し地氣上
して陽とあり春夏此也西間
一萬物と發育を地下氣候す
と云と云一氣微として入す
一十二管飛るとも一則も飛
則みも不起たり若冬至に
一夏至小雜賓を動と云ハ其
餘も辰位を



候氣三重室圖

此圖者出于樂書要錄
今此寫之

以之應動ホクハすといはる是氣知こあ
 里多の管を忍らして入り管ハ知ありて
 氣を忍らんとて施すとて天下古今是理あ
 らんや其説張蒼の定律五勝を推之法又
 始は里京房劉歆又傳會するに五行幽謬
 之術を以ては先に先王の教よりむり
 と云々



樂書要錄云十二律各當其辰耶埋地下入地
 處卑出地處高黃鐘之管埋於子位上頭向南
 以外諸管推之不悉云々

黃鐘生度量衡

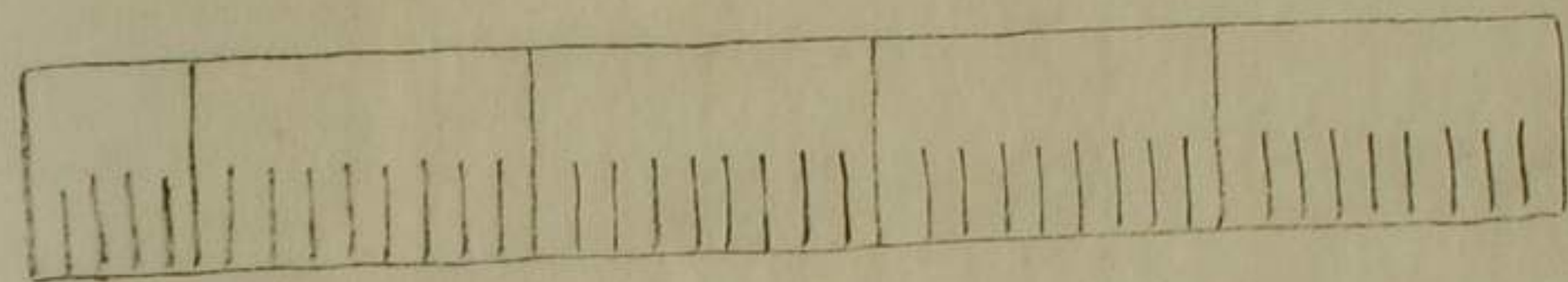
審度

樂書要錄曰度者分寸尺丈引也所以捺物知
長短也本起於黃鐘之長以子穀秬黍中者北
方北方黑黍度之九十黍得黃鐘之長九寸九寸一黍
謂黑黍度之九十黍得黃鐘之長九寸九寸一黍
廣為一分十分為寸十寸為尺十尺為丈十丈
為引而五度審矣

律呂新書凡黍之管中管中容多則十三黍
三分黍之一少一分小三分也積九十
分者分者九寸也則十二百黍也也其尺ハ
凡縱橫斜黍之三尺尺と奉とす此三
種の尺之外歷代種々此尺ある諸書
小見へあり律呂新書も隨志十五等法

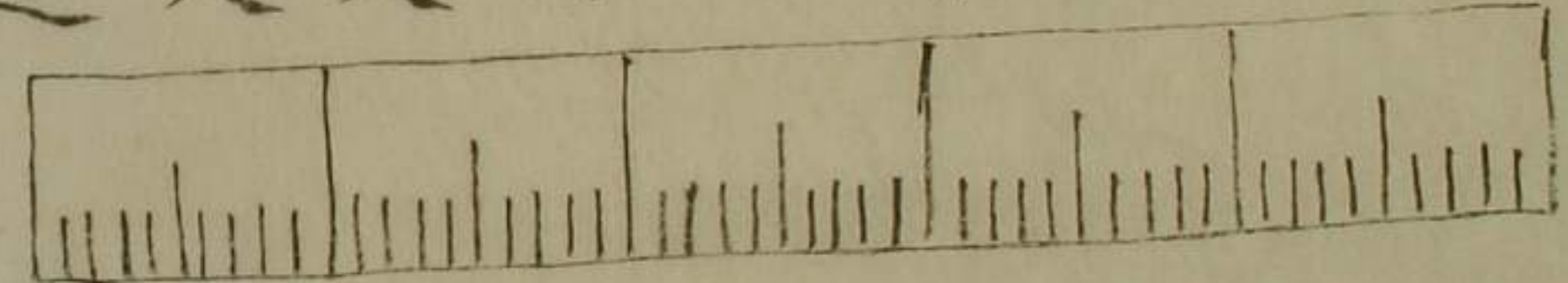
尺見へあり然と雖も其論文而已ありて
圖ハハ止し故今予謹て曲尺を以て奉
と律原之文意考得て七代五種の尺
を圖す即律原乃文を圖下と引載て此
と證とすあり

縱黍尺

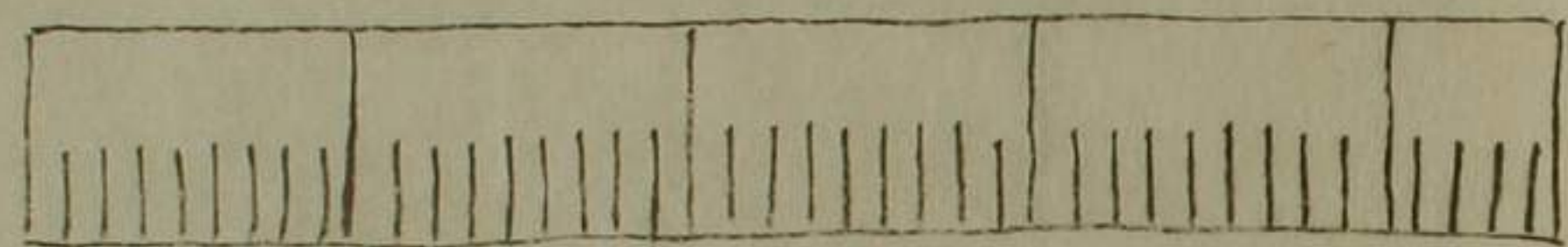


律原云歷代尺
度皆本諸黃鐘
而損益不同有
黃鐘之長均作
九寸而寸皆九
分此黃帝命伶
倫始造律之尺
也是名古律尺
又名縱黍尺選

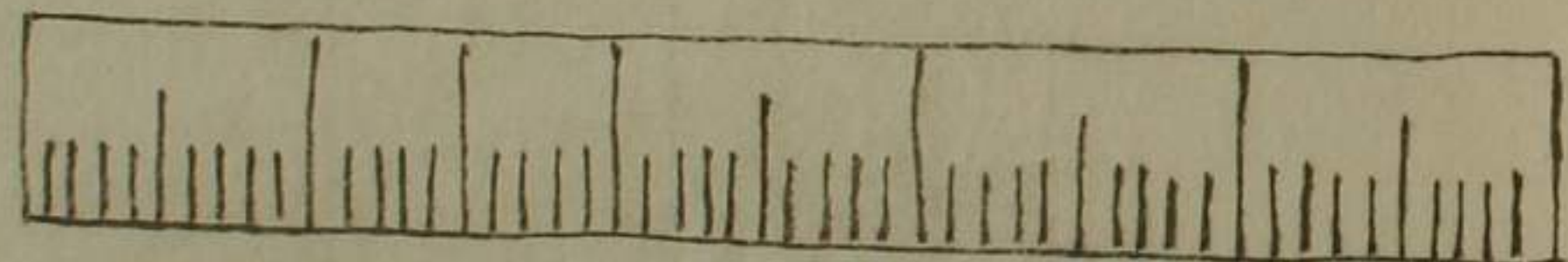
橫黍尺



律原云有以黃
鐘之長均作十
寸而寸皆十分
者此舜同律度
量衡之尺至夏
后氏而未嘗改
故名夏尺傳曰
夏禹十寸為尺
蓋持此尺也又

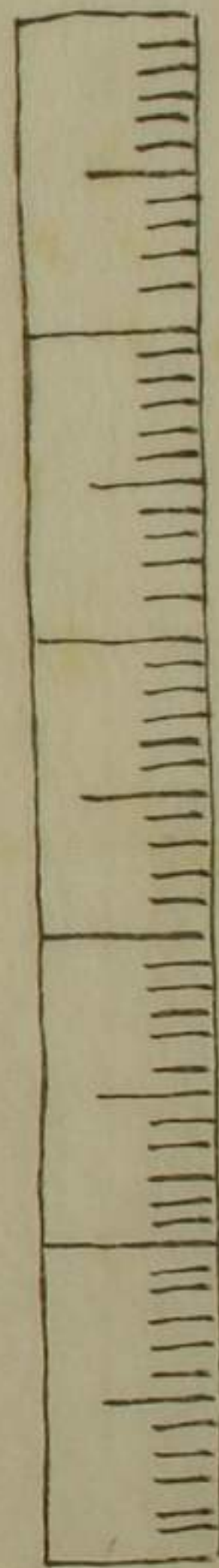


中式之柎黍一
黍之縱長命為
一分九分為一
寸九寸共八十
一分是為一尺
云
又云宋尺即黃
帝尺而宋尺用
之故又名宋尺
云



名古度尺又名
橫黍尺選中式
之柎黍一黍之
橫廣命為一分
十分為一寸十
寸共計百分是
為一尺云
又云周文王尺

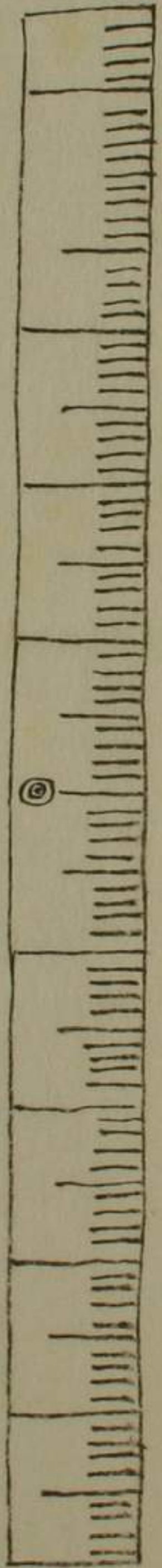
斜黍尺 畧五寸圖之二合之則一尺也



律原云有以黃鐘之長均作九寸外加一寸為尺此漢尺也又云斜黍之尺漢尺也云々

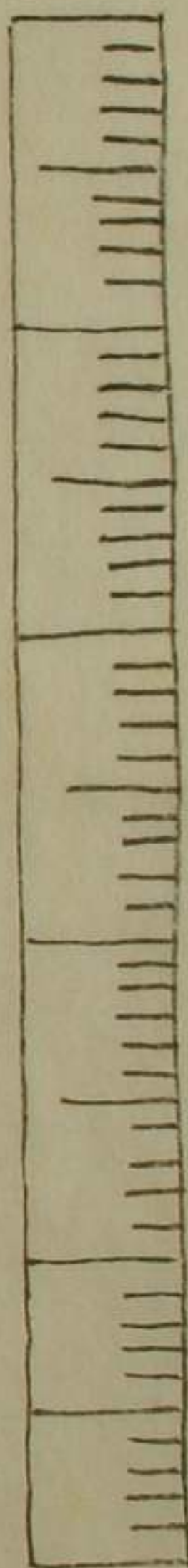
按すに斜黍之尺ハ漢尺此九寸なり所謂黃鐘の黍を斜にもかるゆへ九十分を六々此尺の九寸を十分なるゆへなり

周尺



律原云有黃鐘之長均作五寸減去一段而為尺者此周尺也適當夏尺八寸傳曰武王八寸為尺蓋指此尺也云々蔡元定曰周家十寸八寸皆為尺以十寸之尺起度則十尺為丈十丈為引以八寸之尺起度則八尺為尋倍尋為常云々

成湯尺 畧五寸圖之二合之



律原六夏尺一十二寸五分均作十寸即商尺也高尺最大即今木匠所用曲尺也蓋自魯般家傳以至於唐々人謂之大尺由唐至今用之名曰今尺又名營造尺蓋此尺即殷湯尺也去二寸即夏禹之尺云々去二寸即周武王之尺云々同書唐會要曰唐高祖武德四年行開元通寶錢徑八分蓋唐尺之八分也今因開元錢有之宜以錢考之云々

右七代五種之尺因張氏律原今謹所圖也其

唐尺之一圖幸中根元圭之所圖即出律原奏揮故所抽寫也元圭奏揮云此尺自魯般家傳以至於唐自後 聖德太子傳之本邦至今在和列法隆寺即木匠所用曲尺也雖然家々傳寫其尺長短不一皆失之長大 璋昔日往彼地寫此尺故今者於茲以便後學以今之曲尺校之當九寸八分弱半分即一百二十七分此唐尺一圖其拙慥故今亦云々抽寫其縱橫斜黍等之尺ハ張氏律原此文意云々加つて不合愚考此尺番に比較すれハ各二三分許長大なり即張氏律原の文意を以て考らるゝ云々縦横黍の尺番と校云々愚々圖す云々

ろれ律尺ハ元圭の唐尺也符合く張氏の律原の文意よりして是とめて予々證とすし猶後學の君子彼是參考以校して其是非と正さるや

黍法三種尺 此下三尺於營造尺減去二寸是為真黃鐘

縱黍尺 九黍為寸計八十一分軒轅氏尺宋尺宗之

橫黍尺 十黍為寸計一百分夏后氏尺唐尺宗之

斜黍尺 十黍為寸九寸為尺周景王尺漢尺宗之

愚按すれに秬黍粒ノ縱横ありて縦を長横ハ少短一故小縱黍粒又ハ九粒を計て一寸ノ一粒一分とするの尺此尺ハ皆九數を用て九毫を一釐ノ九重一ノ九分を一寸とする也横黍粒ハ黍粒のよこを計て横ハ少短ハ十粒ヲ計て是を一寸ノ故一十寸と一尺ノて黃鐘の長ハ此尺ハ十數を用て十毫と重ノ十重と分ノ十分と寸ノ十寸を尺ノて黃鐘ハ長と斜黍粒ハたてしあら横もわらぬに計て十粒を一寸ノて九寸と尺ノ此尺ハ十數を用て九寸と尺ノ黃鐘の長ハ以上三種の尺其つり

相替とつへりも其長ハ之ニ同一カニ只
三分損益相生此寸法三種各相替ナリ假
令ハ黄鐘十寸とすきハ林鐘を六寸六分
六厘六毛大簇を八寸八分八厘毛と成律
亦ハ黄鐘九寸も三分損益之法カクハ
知ハ此書ニ載トコル此算法ハ縦法ハ
縦忝ハ黄鐘九寸と損益スル此算術也是
縦忝此尺を根本とす此ハ

嘉量

樂書要録曰量者龠合升斗斛也所以容物知
多少也本起於黄鐘之龠用度數審其容以柜
忝中者十有二百實其龠而之為合十合為升
十升為斗十斗為斛而五量嘉矣

按すに嘉量ハ量此器ナリ周禮ニ依リ
此ハ見ヘリ又律呂新書等ニ其
器の法つす此ハ日本今此器
ハ日本此斗歸す此
嘉量ハ出ルものナリ在博識ニ尋
ニ知ヘリ律呂新書ニ亡子穀柜忝の中
者一千二百と以テ其龠ノ實ヲ井水と以
テ其槩代準シ度數とモテ其容トシ審

少を命とあしせて合と十合を升と
十升を斗と十斗を為斛と云々命ハ黄
鐘ハ管を云籥の字も同一也槩を斗と
如也と訓す中なる者と其黍粒の大き
らと小ありす中式ハ黍粒と云と也子穀
を黒を古黒黍からへ一本振りと云牛黍
ハ類

謹權衡

樂書要録曰權者銖兩斤鈞石也所以稱物平
施知輕重也本起於黃鐘之重一命容千二百
黍重十二銖兩之為兩二十四銖為兩也十六
兩為斤三十斤為鈞四鈞為石權與鈞而生衡

運生規、圓生矩、方生繩、生準、正則
平衡而鈞權矣是為五則也位於北方
大陰為冬為智為水々曰潤下智者謀々而深
故為權北方之義也大小有準輕重有數各應
其衆五權量矣

愚按權衡ハ秤の名故權ハ和訓波加利衡
和訓比良波加利權ハ秤ノ銖也衡ハ秤ノ
桿也此權衡より次第に又規矩準繩を以
生る也い且ゆ規を俗不云と云々此規
矩也矩を曲ツ子を準ハ下墨也繩を墨
坪也又此規矩準繩所謂嘉量ハ器ノ自然
と其弊法をなすも也律原ノ見ハ
嘉量ハ器を以てらん欲者各ハ法の義と

さきも一又斜黍此黄鐘九寸九十分と云
を是其美術さしやすかたを漢代
京房より先らさしむ誤の僻説とて
本法にあらざるも張氏律原に記載ら
まじり類と別縦黍此黄鐘長九寸圖
九方分九と八十一分と云と最上の本説と
すし即其算法つまじらざる律呂新書に
出と之も初学児童曉しむべし今
此のこゝと和解して記著するなり且又
度尺此代も相替たる差するら隨志の十
五等之尺も律呂新書に見へりとのり
し張氏の律原に載らざる此尺度此
明辨するに詳して曉しやすき其文

意を取て今謹て圖小つくりて此書にあら
んとし然則ハ尺度あり相きたる
を復らざる何時も律呂と改試へる
此便しも成るなり然も律に必ず尺此を
以て定へる又縦黍を以て求へる起灰
候気此説も此道路に説述に傳へるに
虚言のこゝと誰ありて慥に氣を候見し
人有へけん六尺書に載るその乃虚説
を以て音律原に其辨論詳に見へるは
是も又特へる然に何を以てはるて
其声気此元を知る事とを其色氣此元と
求知へる與音よりを蔡元定此律呂新書
より見へる其文意ハ色氣の中よりある

すく欲ふ、而も準りて定法へ物も
さし多、則先多竹を截て黄鐘此管より
擬て長短と一分差りきりて各其長を假
り九寸と定其圍徑をとり、黄鐘の法れ
とく、扱是の、く、りて件れ長短の管
共を彼是更にたぐひに吹試とさ、中声
を得、又候気れ管を地よりつむ、浅
も、深りて以て列候へ、中氣も驗る
へ、苟も色知し、氣應する、さ、黄鐘の黄
鐘なる者、信なり、黄鐘なる者、信る、則
十一律度量權衡も、得る、後世に
ま、出るとを知らず、唯尺の、りて
求之、晋氏より下多、と、金石より求

梁隋より以來又、れと、柎柎、柎考り、
而に王朴よりりて、剛果ありて、柎柎から用目用逐
に、專、柎と恃て金石も復攻す、金石の真
偽固に、と、く、信、柎柎の、れを
歳、豊凶あり、地に肥瘠あり、種、長短、小
大圖、安不向ありて、尤、恃へ、ん、況、言
人、謂、子、穀、柎、柎、中、者、實、其、籥、則、是、先、黄、鐘、を
得て、而、りて、後、れを、度、に、柎、を、以、す、不、足
と、多、を、大、粒、を、り、餘、わ、れ、と、多、ハ、小、粒
か、る、を、入、替、て、兎、角、九、十、柎、之、長、に、管、中、に
一、十、二、百、粒、の、柎、を、い、る、を、約、り、て、周、徑
の、廣、さ、を、り、て、以、て、度、量、權、衡、之、數、を、生、ず
既、の、三、律、柎、生、ず、れ、と、わ、ら、ん、百

世は下百世此前之律を求むく欲者も亦此
道を声気此元と求て泰を必とす然しやな
さるに其律を得とあり抑算律の法は音
声相生應和の理を数と以て知むらん
て上言此聖人造置給う道も實を耳決の
明察に聽得る事あるに算法して忽微
を論す然し耳もも忽杪たるもた
ゆるに聞るるに耳もも算と待
して三分損益譜る符合す樂家の者も其
習と得て相生の應和の耳を以て聞定む
亦算律此法を學者のいふも、多わると
を不聞也嗚呼嘆ふ哉夫律美の道を天理
自然此妙術且萬事此根元也此道を知らん

いやは多のらん声樂之貴也天地を絲竹之
間に籠り陰陽を律呂之裏に和す又天地
萬物之太祖と云へる律學のあらん
何よりありあつた豈此理を知らんや
學へし勤學し此書を後世童蒙に初學
の書とあつて下學に使ふんと欲す予
不すたりと云ふも音声之道にふりあは
家業此書を以て家傳を以て諸の律書を
考學し朝マヨウクあり得ると記之
見者文此書を以て道は深きと云
ふことありと云ふ

時享保十三戊申歲中夏中旬

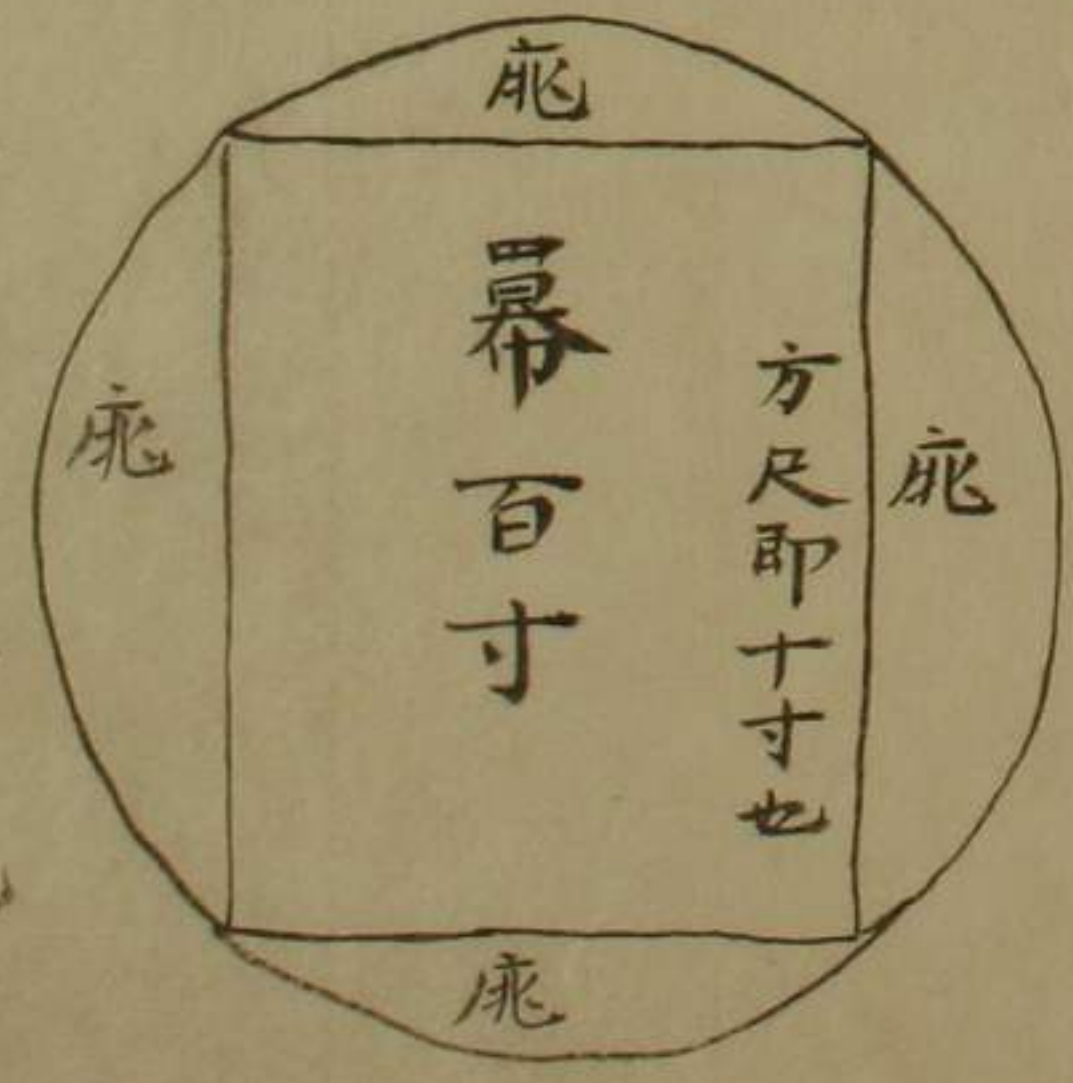
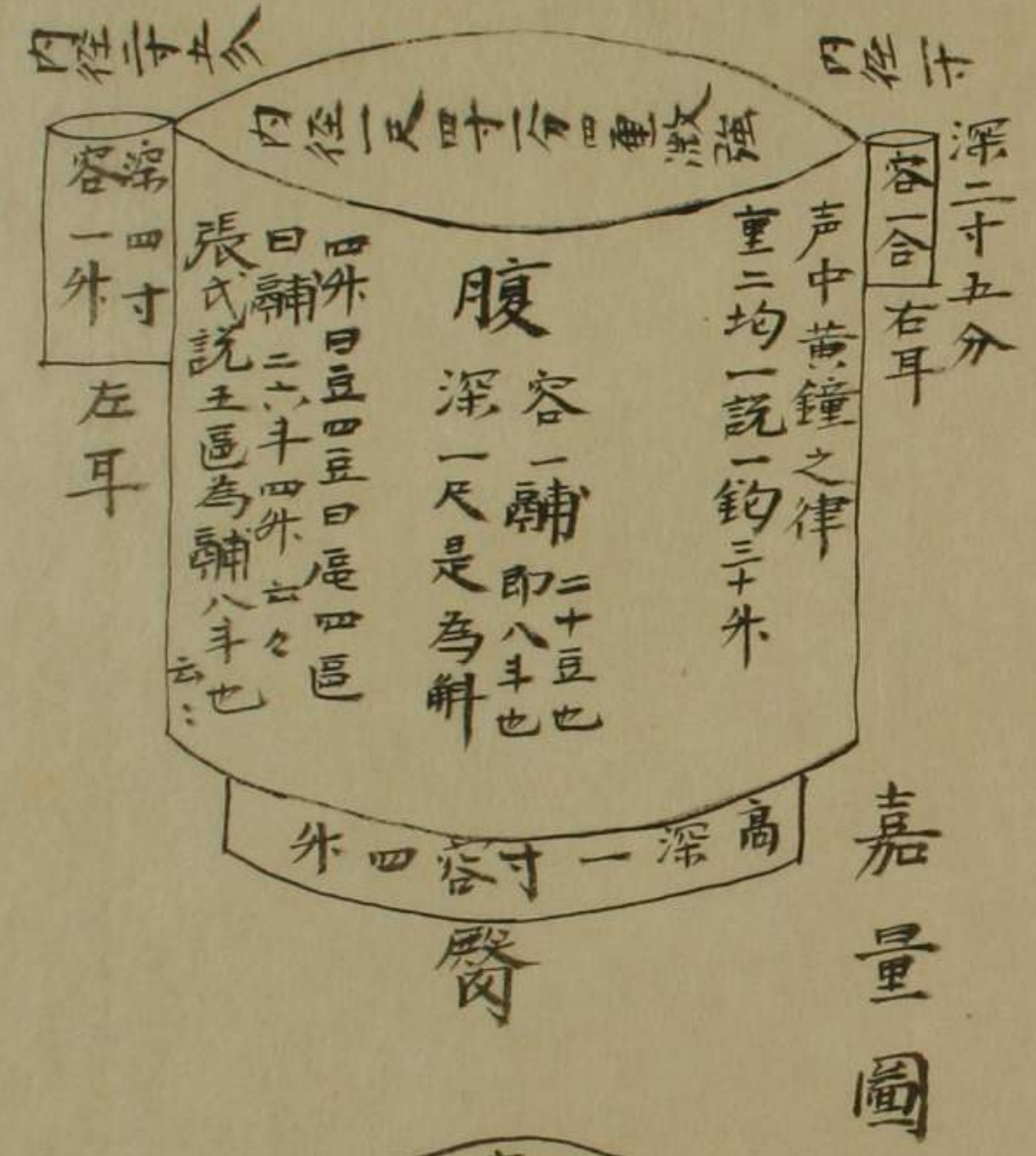
從四位下遠江守太奉昌名

追攷黃鐘長九寸空圍九方分二當一也然ト
キハ是圍十分三分八毫徑三分四厘六毛也
每一分本數十三粒又三分粒の一を容る也
之れ九十九をく多れハ則一千二百粒と成
なり只圍を九方分と心得すして九分と付
くると心得る多きを徑も三分と成一也然ト
之管中千二百粒つゞ積りあらしむ也
之を疎畧を以て説き用ひたり又以下十
一律の圍と妄説共なり共是も十二律の圍
徑を皆同じて其長短を損益するべしなり也
と心得一

漢志曰量者龠合升斗斛也所以量多少也本
起於黃鐘之龠用度數審其容以子穀秬黍中

者十有二百實其龠以井水準其槩合龠為合
 十合為升十升為斗十斗為斛而五量嘉其
 法用銅方尺而圓其外旁有鹿焉其上為斛其
 為斗五耳為升右耳為合龠其狀似爵上三下
 參天兩地圓而函方左一右二陰陽之象也
 其圓象現其重二鈞備氣物之數方有一十五
 百二十邑中黃鐘之宮始於黃鐘而又覆焉
 律原古嘉量器也其形圓以銅為之上有圓足曰
 腎上有兩耳量腹內徑一尺四寸一分四厘微強高深一尺腎
 內徑一尺高深一寸耳內徑二寸五分高深四寸俱厚
 一分造用夏尺量腹容二十豆是為一輔腎容四升是為一
 豆耳容二十龠是為一升
 律呂新書注曰以其容為之名也四升曰豆四豆曰區四區曰輔六斗果

端直應繩平正應準
 容受應量輕重應衡
 圓應規函方應矩
 聲音應律八法具焉



旁四鹿是月唇卜也

